Think globally, Act locally

2019 Korea

7.9-7.15

文部科学省委託 2019 年度初等中等教職員国際交流事業

韓国政府日本教職員招へいプログラム　実施報告書

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

文部科学省委託 2019 年度初等中等教職員国際交流事業

韓国政府日本教職員招へいプログラム

実施報告書

水原市、春川市、仁川広域市、ソウル

2019 年 7 月 9 日(火) ― 7 月 15 日(月)

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター （ＡＣＣＵ）

はじめに

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU: Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO）は、ユネスコの基本理念に基づき、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に資するため、アジア太平洋の人々と協働し、文化と教育の分野において地域協力・交流活動を推進しています。

ACCU は主にアジア太平洋地域の国々の相互理解と友好の促進を目的とし、日本政府および国際連合大学の協力のもと、2001 年より教職員の国際教育交流事業を開始しました。この国際教育交流事業は、日本と韓国、中国、タイおよびインドとの間で行われ、これまでに 4 千人近くの海外教職員を日本へ招へいし、また日本からは 1 千人近くの教職員を海外に派遣してきました。これにより、日韓・日中・日泰・日印間で、多くの教職員間交流および学校間交流が生まれ、これらの国々の相互理解と友好の増進に大きく貢献してまいりました。

日本と韓国の国際交流事業としては、国際連合大学による国際教育交流プロジェクトが開始され、2000 年に設立された「ユネスコ青年交流信託基金」で実施されていた「韓国教職員招へいプログラム」は同年、本事業のもとで開催されることとなり、同大学の委託を受け、文部科学省、韓国ユネスコ国内委員会（KNCU)、韓国教育部の協力のもとで ACCU が運営・実施を担当してきました。2003 年以降は、招へいプログラムと対をなすものとして、日本教職員を韓国へ派遣する派遣プログラムを実施してきました。招へい・派遣を含むこれら一連の交流事業は韓国政府に高く評価されることとなり、2005 年からは KNCU による招へいプログラムとして日韓教職員相互交流が始まりました。

2018 年度以降は、文部科学省委託事業「2019 年初等中等教職員国際交流事業」の一環として日本と韓国の国際交流事業が実施されており、今年の 2019 年 7 月 8 日から 7 月 15 日に実施された「韓国政府 日本教職員招へいプログラム」には、前年度に韓国教職員の受け入れにご協力いただいた自治体や学校の教職員、および公募により選抜された教職員等、計 50 名が参加しました。

参加者はソウルで韓国の教育の変化や政策、そして韓国のユネスコスクールに関する講義を受けたのち、水原市、春川市、仁川広域市、ソウルを訪問しました。各地域の教育委員会、学校、および教育文化施設等の訪問を通して、韓国における教育の現状と課題や、日韓両国における教育課題の共通点と相違点について学ぶとともに、韓国の教職員や児童生徒との交流を図ることができました。このたびの訪問が、韓国の教育や文化に対する参加教職員の理解を深めることはもとより、帰国後の諸活動を通じて日韓の教職員間、学校間の交流のさらなる発展の一助となるよう願っております。

最後に、このプログラムにご支援とご協力をいただきました、韓国教育部、韓国ユネスコ国内委員会、文部科学省、及び、訪問先の各学校をはじめ、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

2019 年 2 月

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

目　次

１．プログラム概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

２．実施内容・訪問記録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

３．成果と今後への活用・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27

Ａグループ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28

Ｂグループ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52

事業担当者コメント・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74

付録　・・75

過去のプログラム実績・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・76

プログラム写真・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・77

１．プログラム概要

プログラム概要

1. 実施の背景

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は、ユネスコの基本理念に基づき、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に資するため、アジア太平洋の人々と協働し、教育と文化の分野において地域協力・交流活動を推進しています。ユネスコ憲章の「戦争は人の心の中で生れるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。」という言葉に沿い、ACCU はその活動の一つとして、アジア太平洋地域の国々の相互理解と友好の促進を目的に、未来を担う多くの子供に影響力を持つ「教職員」を対象とした国際交流事業を 2001 年より開始しました。

日本と韓国の間の国際交流事業としては、韓国から教職員を招へいする「韓国教職員招へいプログラム 」を 2001 年から文部科学省の協力のもとで、2003 年からは国際連合大学の委託を受けて実施してきました。また、2003 年からは日本教職員を韓国に派遣するプログラムを実施し、これらの一連の事業が韓国政府に高く評価されることとなり、2005 年からは韓国教育部の協力のもと韓国ユネスコ国内委員会（KNCU）により「韓国政府日本教職員招へいプログラム 」が実施されています。

2. 目的・期待される成果

本プログラムは、日本の教職員を韓国に派遣し、韓国の教育・文化施設を訪問し、韓国の教職員や児童・生徒との交流を通じて、教職員が相手国に対する理解を深めるとともに、お互いに学び合い、教職員や生徒との相互理解と友好を促進し、教職員間のネットワークを構築・強化することを目的としています。また、帰国後には、教職員が自身の学びを教育現場において児童・生徒・教職員・地域住民等に伝え、持続可能な開発のための教育（ESD）や地球市民教育（GCED）を含む国際理解・国際交流を推進する担い手となり、ひいては日韓間の相互理解と友好の促進 、そして平和で持続可能な世界の実現に繋げることが期待されています。

3. 活動内容

・韓国の教育制度や関連事項についての講義受講。
・学校等の教育施設の訪問（授業見学、教職員・児童生徒との交流、ESD や GCED の好事例の視察等）
・韓国教職員との交流会
・文化施設の視察

4. 日程

出発前オリエンテーション：2019 年 7 月 8 日（月）
プログラム実施期間：2019 年 7 月 9 日（火）～7 月 15 日（月）（7 日間）

日付	日程	訪問先	活動
7 月 8 日（月）	前日	成田	・出発前オリエンテーション
7 月 9 日（火）	第 1 日目	成田、ソウル	・ソウル到着 ・現地オリエンテーション ・韓国の教育制度等に関する講義 ・開会式・歓迎晩餐会

日付	日程	訪問先	活動
7 月 10 日（水）	第 2 日目	キョンギド・スウォン（京畿道・水原市）	・ユネスコスクール訪問 ・教育庁表敬訪問 ・歓迎晩餐会
7 月 11 日（木）	第 3 日目	A グループ：インチョン（仁川広域市） B グループ：カンウォンド・チュンチョン（江原道・春川市）	［2 グループに分かれて地方へ］ ・ユネスコスクール等の訪問 ・韓国教職員・児童生徒との意見交換
7 月 12 日（金）	第 4 日目	ソウル	・ユネスコスクール等の訪問 ・グループ情報共有会
7 月 13 日（土）	第 5 日目	ソウル	・文化施設訪問
7 月 14 日（日）	第 6 日目	ソウル	・韓日教師教育フォーラム ・報告会 ・閉会式
7 月 15 日（月） ※祝日	第 7 日目	ソウル、成田／大阪／福岡	・帰国準備 ・帰国（成田／大阪／福岡へ）

5.参加者

次のとおり教職員、随行員併せて 50 名を参加者とする。

（1）2018 年度初等中等教職員国際交流事業の受入機関および受入校が推薦する教職員

（2）2019 年度初等中等教職員国際交流事業「韓国教職員招へいプログラム」受入予定の機関および学校が推薦する教職員

（3）公募により選抜された教職員

（4）日本ユネスコ国内委員会を含む文部科学省、および ACCU の職員

6. 参加資格

（1）国際交流・国際理解教育・ESD・GCED 等の活動に携わっている、または高い関心を持っており、韓国の教職員や生徒と積極的に交流し、帰国後には国際交流・国際理解教育・ESD・GCED 等の推進に寄与できる者。

（2）初等 中等教育の教職員および教育行政職員であること。ただし、訪問団長・副団長はこれに限らない。

（3）健康で、オリエンテーションを含めたプログラムの全日程に参加が可能であること。

（4）E メールを用いて円滑に連絡ができ、また Microsoft Word／Excel を用いて所定フォーマットに必要情報を入力し提出できること。

（5）過去に本プログラムへの参加がないこと。

（6）日本国籍であること。

7.渡航費等諸経費

（1）KNCU が以下について負担する。

- 往復航空運賃：日本と韓国の国際空港間のエコノミークラス航空券
- 公式行事に係る韓国内の交通費
- 宿泊と食事：韓国滞在中の全ての食事が手配される。但し、公式行事のない日の夕食については、支給される食費（1食当たり 20,000 ウォン）から参加者が支出することとする。

（2）ACCU が以下について負担する。

- 日本国内の交通費：オリエンテーション日の自宅最寄り駅から会場までの交通費、および帰国日の到着空港からの自宅最寄り駅までの交通費（ACCU の規定に準ずる）
- オリエンテーション日（7 月 8 日）の宿泊

注 1：オリエンテーション開始までに到着可能な交通手段がない場合、前日の宿泊費を支給する。

注 2：帰国日中に居住地に到着可能な交通手段がない場合に限り帰国当日の宿泊費を支給する。

注 3：本プログラムは公務扱いでの参加となるため、日当は各所属先での負担とし、ACCU からは支給しない。

（3）各参加者は下記について負担する。

- 海外旅行損害保険：各参加者は、プログラム期間中の万一の事故に備え、出発前に必ず各自の責任において、海外旅行損害保険に加入しておくこと。
- 上記（1)、(2）以外の諸経費

（4）旅券と査証について

- 旅券(パスポート)：入国時に 3 ヶ月以上有効なパスポートを各自で準備すること。
- 査証(ビザ)：一般旅券の場合はビザの取得は不要。

8. 通訳

韓国国内でのプログラム期間中は日本語と韓国語間の通訳を配置する。

プログラム日程

日にち	時間	内容	宿泊
7/8(月)	13:30-13:50	オリエンテーション受付	ANA クラウンプラザ成田 〒286-0107 千葉県 成田市堀之内 68
	15:30-19:00	オリエンテーション、ホテルチェックイン	
	19:30-21:00	懇親会	
7/9(火)	09:00	成田空港出発(OZ107)	コリアナホテル ソウル特別市中区 世宗 135
	11:30	仁川国際空港到着	
	15:30	ホテル到着、チェックイン	
	17:00-17:10	プログラムオリエンテーション	
	17:10-17:40	韓国の教育についての講義、 韓国のユネスコスクールの紹介	
	18:00-20:00	開会式及び歓迎晩さん会	
7/10(水)	A グループ		
	07:30	ホテル出発	
	08:30-12:40	水原外国語高等学校訪問 昼食:学校給食	
	13:15-15:45	水原市文化探訪（水原華城、水原博物館）	
	16:00-17:15	水原教育支援庁訪問	
	17:30-20:00	歓迎晩さん会	
	21:00	ホテル到着	
	B グループ		
	08:50	ホテル出発	
	10:00-12:40	松林小学校訪問 昼食:学校給食	
	13:15-15:45	水原市文化探訪（水原華城、水原博物館）	
	16:00-17:15	水原教育支援庁訪問	
	17:30-20:00	歓迎晩さん会	
	21:00	ホテル到着	
7/11(木)	A グループ		
	09:30	ホテル出発	
	11:00-13:30	仁川広域市観光及び昼食	
	13:30-16:40	仁川国際高等学校訪問	
	17:00-18:30	夕食及び教師間の対話	
	19:30	ホテル到着	
	B グループ		
	08:30	ホテル出発	
	10:30-13:30	昼食及び江原道観光	
	13:30-16:20	江原明震学校訪問	
	18:30	ホテル到着	

7/12(金)	A グループ		
	08:10	ホテル出発	
	09:30-13:50	塩光中学校訪問 昼食:学校給食	
	14:00-16:00	評価会	
	17:00	ホテル到着及び休憩 夕食:お弁当	
	B グループ		
	09:40	ホテル出発	
	10:00-12:30	ソウル青坡小学校訪問 昼食:学校給食	
	13:00-15:00	評価会	
	15:00-17:00	自由時間	
	17:00-18:30	夕食及び教師間の対話	
	19:00	ホテル到着	
7/13(土)	10:00	ホテル出発	
	10:30-12:30	国立中央博物館：伝統工芸体験	
	12:30-14:00	昼食	
	14:00-15:00	国立中央博物館：ドーセント観覧	
	15:30	ホテル到着	
7/14(日)	09:00-11:15	韓日教師教育フォーラム	
	11:15-12:00	報告会	
	12:00-12:10	閉会式	
	12:10-14:00	昼食	
	14:00	(夕食:個人)	
7/15(月)	04:20	関西行きの搭乗者ホテル出発 (仁川国際空港へ移動)	
	04:50	福岡/成田行きの搭乗者ホテル出発 (仁川国際空港へ移動)	
		仁川国際空港到着 3 路線に分かれて帰国 仁川～関西　OZ112　07:55–09:40 仁川～福岡　OZ132　08:55–10:30 仁川～成田　OZ102　09:00–11:20	

【オリエンテーション講師】

文部科学省 総合教育政策局調査企画課外国調査第二係
専門職　田中光晴
文部科学省 初等中等教育局特別支援教育課
課長補佐　斎藤更紗

【韓国側随行者】

韓国ユネスコ国内委員会(KNCU) ：

ソン・ナクヒョンチーム長

イ・スヨン専門官

イ・キョンイム専門官

チョ・ダナ専門官

参加者リスト

A グループ

No.	氏名	所属	職名	担当係
A-01	立花　宏介	奈良育英中学校・高等学校（奈良県）	教頭	副団長
A-02	本多　光	兵庫県立川西明峰高等学校（兵庫県）	教諭	記念品
A-03	川本　明香	大阪成蹊女子高等学校（大阪府）	教諭	写真
A-04	神内　千波	大阪教育大学附属高等学校池田校舎（大阪府）	教諭	記録
A-05	大川　沙織	立命館宇治中学・高等学校（京都府）	専任教諭	庶務
A-06	奥川　美希	奈良市立京西中学校（奈良県）	教諭	記録
A-07	金宮　嗣允	大阪学芸中等教育学校（大阪府）	教諭	写真
A-08	平岩　尚子	AICJ 高等学校（広島県）	教諭	報告会原稿作成
A-09	髙村　克徳	北海道札幌市立篠路西中学校（北海道）	教諭	記録
A-10	亀田　涼子	青森県立青森東高等学校（青森県）	教諭	会議進行
A-11	森田　真広	岡山龍谷高等学校（岡山県）	主査	写真
A-12	別府　信一	高知県立高知東工業高等学校（高知県）	教諭	記録
A-13	近藤　和久	愛知県立足助高等学校（愛知県）	教諭	記録
A-14	横井　尚美	愛知県教育委員会（愛知県）	教諭	記録
A-15	安田　亨子	熊本市立桜山中学校（熊本県）	教諭	出し物
A-16	中平　聖子	長野県白馬高等学校（長野県）	教諭	出し物
A-17	山口　晴敬	北海道札幌月寒高等学校（北海道）	教諭	記録
A-18	石井　淳	藤沢総合高等学校（神奈川県）	教諭	記録
A-19	武上　雄輔	藤井学園寒川高等学校（香川県）	教諭	記録
A-20	岡田　勝	藤井学園寒川高等学校（香川県）	教諭	記念品
A-21	斉藤　真吾	筑波大学附属坂戸高等学校（埼玉県）	教諭	報告会原稿作成
A-22	陣野　俊彦	東京都大島海洋国際高等学校（東京都）	教諭	会議進行
A-23	松野　至	名古屋経済大学市邨高等学校（愛知県）	教諭	グループ報告書
A-24	織田　俊	神奈川県教育委員会（神奈川県）	指導担当主事	記録
A-25	小口　真緒	文部科学省	係員	
A-26	岡野　晃一	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	プログラム・スペシャリスト	

B グループ

No.	氏名	所属	職名	担当係
B-01	北岡　淳子	京都教育大学附属特別支援学校（京都府）	教頭	団長
B-02	鈴木未央子	八千代市立大和田南小学校（千葉県）	教諭	記録
B-03	岩附ありさ	八千代市立みどりが丘小学校（千葉県）	教諭	記録
B-04	中里　孝平	八千代市立大和田西小学校（千葉県）	教諭	庶務
B-05	川崎　義昭	青森県立八戸市立城下小学校（青森県）	教諭	記録
B-06	蒲生　邦博	アサンプション国際小学校（大阪府）	教諭	会議進行
B-07	金子　瑛	晴明丘小学校（大阪府）	教諭	記録
B-08	三木　恵介	奈良市立都跡小学校（奈良県）	教諭	記念品
B-09	水上　智裕	奈良市教育委員会（奈良県）	課長補佐	会議進行
B-10	朝日　仁美	糸魚川市立糸魚川小学校（新潟県）	非常勤学校図書館司書	写真
B-11	海老沢　穣	東京都立石神井特別支援学校（東京都）	指導教諭	報告会原稿作成
B-12	山岸　香織	越前市北新庄小学校（福井県）	教諭	写真
B-13	久次米晶文	上板町立高志小学校（徳島県）	主任主事	報告会原稿作成
B-14	窪津　宏美	横浜市立南吉田小学校（神奈川県）	主幹教諭	出し物
B-15	渡邉　知和	横浜市日枝小学校（神奈川県）	教諭	記録
B-16	坂下　充輝	札幌市立北野平小学校（北海道）	学校事務職員	グループ報告書
B-17	野村　恵子	伊勢市立有緝小学校（三重県）	教諭	記録
B-18	松本　恭子	目黒区立五本木小学校（東京都）	栄養教諭	写真
B-19	吹越　奈央	府中市立府中第三小学校（東京都）	主任教諭	記録
B-20	久保　智章	福岡県立小倉聴覚特別支援学校（福岡県）	主幹教諭	記録
B-21	宇田　綾恵	観音寺市立大野原小学校（香川県）	教諭	出し物
B-22	成田　潤也	神奈川県教育委員会（神奈川県）	指導主事	記念品
B-23	斎藤　更紗	文部科学省	課長補佐	
B-24	藤澤　弥生	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	プログラム・オフィサー	

※両グループとも、所属・職名は当時のまま掲載している。

プログラム関係機関

＜日本側機関＞

文部科学省/Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology of Japan

駐大韓民国日本国大使館/Embassy of Japan in Korea

＜韓国側機関＞

韓国教育部/Ministry of Education, Republic of Korea

水原教育支援庁/Suwon Office of Education

駐日本国大韓民国大使館/Embassy of the Republic of Korea in Japan

＜訪問校＞

水原外国語高等学校/Suwon Academy of World Language

仁川国際高等学校/Incheon International High School

塩光中学校/Yumkwang Middle school

松林小学校/Suwon Songlim Elementary School

江原明震学校/Gangwon Myeongjin School for the Blind

ソウル青坡小学校/Seoul Cheongpa Elementary School

＜企画・実施・運営＞

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター/
Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)

２．実施内容・訪問記録

７月８日（月）　出発前オリエンテーション（成田）

自己紹介をする参加者の様子

出発の前日、成田空港近くにある ANA クラウンプラザホテル成田にてオリエンテーションが実施された。

文部科学省 田中光晴氏より「韓国の教育事情」に関して講義が行われ、参加者は韓国の教育政策と近年の教育動向や課題について学ぶとともに、「新時代の初等中等教育の在り方」については、当プログラムに随行する同省斎藤更紗氏より講義を頂いた。

また、自己紹介、ACCU による注意事項がおこなわれた後、レセプションで披露する歌の練習を参加者全員で行った。

講義「韓国の教育事情」Q&A（抜粋）

Q：中学受験、高校受験が無くなった中で生徒の試験に対するモチベーションは保つことが出来ているのか

A：大学入試で学校生活記録簿(内申)を重視する学校は多いので、学校の勉強が疎かにはなっていない。中学校の自由学期制の成果など、内容が問われている。

Q：職員室がないと教員間の関係が築かれないのではないか。

A：ぜひ、現場で観察してきて欲しい。ただ、校務支援システムが国全体で整備されており、小・中・高・大の全てで閲覧が可能である。(生徒・保護者も閲覧可能。クラスのホームページもそこで開設が可能である)

Q：韓国の方が日本より世論の教育熱が高いように感じるがなぜか？

A：大統領制の側面が大きいと言われていて、大統領選の公約柱に教育がある(国民に分かりやすい・国民の関心ごとでもある）。例えば、教育税の導入や宝くじの報奨金の一部が教育に当てられており、日本より教育に導入されているお金は大きい。

講義「新時代の初等中等教育の在り方」内容（抜粋）

●現代の教育課題について

高校生の学習時間減少や学習意欲の希薄化

大学授業に最低限必要な科目以外を真剣に学ぶ動機の低下

学校の ICT 環境の地域差。

●Society5.0 時代の教育・学校・教師の在り方について

読解力や情報活用能力、教科固有の見方・考え方を働かせて自分の頭で考えて表現する力

対話や協働を通じて知識やアイデアを共有し新しい解や納得解を生み出す力

7月9日（火）プログラムオリエンテーション（ソウル）

江原大学准教授であるシン・チョルギュン氏による「韓国における教育の変化と主な政策」講義を聴講する日本教職員

プログラムの初日、韓国ソウルのコリアナホテルにて KNCU 主催によるプログラムのオリエンテーションが実施された。

江原大学准教授シン・チョルギュン氏より「韓国における教育の変化と主な政策」というテーマで講義が行われ、参加者が韓国の教育概要と近年の教育改革等について学ぶ機会となった。

続いて、韓国ユネスコ国内員会（KNCU）ユネスコスクールチーム長であるソン・ナクヒョン氏より「韓国の ASPnet 紹介」について講義が行われ、韓国のユネスコスクールの現状ならびに取組について理解を深めることができた。

オリエンテーションの概要

韓国教育の変化と主な政策についての講話を聞き、まず驚いたのは国全体としての教育への関心の高さである。多くの政策や予算、人材が教育のために組まれ、子どもたちの成長のために国が全力で取り組んでいることが分かった。特に教育政策の中で勉強になったのが、韓国で新しく導入された「自由学期制」「高校単位制」である。「自由学期制」は、子どもたちの「こんなことを学びたい」という願いについて教育課程に編成することで、主体的に学ぶ態度を育成することができ、人間関係の改善にも役立ったということだった。日本の学習過程においては、すべての教科で問題解決的な学習が推奨されているが、教育課程に位置付けられた内容を教えるだけで精いっぱいになってしまったり、評価の際にはテストに頼ってしまったりするという現状もあるため、学期をすべて問題解決的な学習とするという韓国の政策は革新的であると感じた。「高校単位制」についても、子どもの関心や適正に合わせ、他校と連携したり、外部人材を活用したりしながら子どもが希望する教科を学ぶことができるというシステムに衝撃を受けた。

韓国の教育の未来について話を聞く中で、SDGs との多くの共通点を見つけた。人間関係を重視するということは、SDGs17「パートナーシップで目標を達成しよう」、不平等・格差をなくすという目標は SDGs10「人や国の不平等をなくそう」、主体的な学習者になるようにするとは SDGs4「質の高い教育をみんなに」、貧困や機会が足りない・多文化の子どもたちを包容するとは SDGs1「貧困をなくそう」など、韓国の多くの目標が SDGs につながっている。また、これは韓国のみならず、日本にも共通して言える目標であると言える。日本も韓国も、ともに学び合いながら、共通の目標に向かってさらに教育の質を向上させていくことが、今後のさらなる成長のポイントとなるのではないかと感じた。

7 月 9 日（火）歓迎晩さん会（ソウル）

ユネスコ韓国委員会教育分科委員長（韓国教育開発院院長）のバン・サンジン氏の挨拶から、日韓の交流が図られる会が始まった。晩餐会では、互いの国の教育事情に関する話題はもちろんのこと、現在流行しているものやおすすめの観光地・お土産品のことなどについて話が弾んでいた。英語だけでなく、韓国語での簡単な挨拶に挑戦したり、翻訳アプリを駆使したりして、積極的に伝えよう・聞こうとする姿勢が各テーブルグループに見て取れた。とても有意義な時間となり、これから始まるプログラムに対する期待が大きく高まる場となった。

韓国ユネスコ国内委員会教育分科委員長（韓国教育開発院院長）のバン・サンジン氏の挨拶

歓迎晩さん会での様子

7 月 10 日（水）水原教育支援庁表敬訪問・歓迎晩餐会（水原）

水原教育支援庁への表敬訪問

チェ・スンオク教育長から歓迎挨拶があり、「大韓民国の教育を率いている京畿道の代表として『ユネスコ日韓教師対話』プログラムを通じて皆さんを迎えることは喜ばしい。水原教育支援庁も、知識と生き方が一致し、分かち合いを実践する民主市民の素養を身につけるために教師、児童・生徒、保護者、支援庁が一体となって努力している。今日のこの出会いが、情報を共有し、相互協力して韓日両国の未来教育発展のために意味ある時間となることを願います。」と述べられた。

続いて北岡淳子団長から答礼があり、「午前中の A、B グループに分かれての学校訪問をお世話いただき、また、質問にもお答えいただけてありがたかった。さらに、午後は韓国の歴史文化にも触れ、有意義な時間を過ごすことができた。日本の学習指導要領には『他国を尊重し』という文言があるが、この研修はそれを教育現場で具現化するのに有効な手立てとなるだろう。自己の教育理念を持ちつつ他者に学ぶ姿勢のあることは大変重要であり、この研修が平和の礎となることを祈念している。」と述べた。

記念品交換を行った後は、水原教育支援庁の紹介があった。幸福水原教育という「幸せな学び」、「学校民主主義」、「安全な学校」、「教育行政の革新」の 4 つに重点を置いており、論述の重視や生徒中心の進路教育活性化、学校文化の改善、地域教育共同体の構築、生徒の自治活動活性化、行政実務士導入による教員の負担軽減、管理職から教諭への一部決裁権移譲による校務迅速化、ユネスコスクールの財政支援、オーガニック野菜による給食など健康で安全な学校づくり、危機対応能力の向上などを通して生徒中心の教育を実現している様子が説明された。

Q&A より（抜粋）

Q：一点目、行政実務士の資格はあるか、また、その仕事内容はどのようなものか。二点目、管理職から教諭に決裁権を委譲した仕事の内容は何か。

A：一点目、教務の場合でいうと、コンピュータと事務の資格が必要で、文書作成を担当している。二点目、以前はトップダウン方式だったが、今は組織構造の水平性を保つために、業務ごとに決裁権者を設定して一人一人が自律的に業務に取り組んでいる。

Q：日本では働き方改革が進んでいない現状にあると認識している。学校文化が変わらないうえに、教育行政は様々の仕事を持ってくる。また、保護者は学校に依存している。韓国ではどうか。

A：京畿道では革新教育に取り組んでいる。これは組織文化を変える意味を内包しており、働き方改革については、次の 4 点に取り組んでいる。

1 業務軽減のため、教育行政から学校への仕事を減らす。2 校務軽減のため、韓国では初めて行政実務士を配置。現在は学校の規模により、1 名から 5、6 名配置している。3 会議を減らしている。週に 1 度の会議を月に 1 度にした。また、水曜日は出張や会議を禁じ、教材研究に専念できる体制を整えている。4 管理職の決裁権限の一部を教諭に委譲した。

A グループ

7 月 10 日（水）水原外国語高等学校訪問（水原市）

訪問スケジュール

8:40 – 9:00 到着及び移動
9:00 – 9:30 歓迎行事・学校紹介
9:30 – 9:50 学校見学
10:00 – 10:50 授業参観・文化授業
11:00 – 11:50 教員懇談会
11:50 – 12:40 昼食
12:40 – 13:00 記念撮影

日本教職員を出迎える生徒たち

学校・機関の特色

韓国では一般的に高校入試がなく、住んでいる地域の高校に進学する制度をとっているが、水原外国語高校は面接試験により選抜する特別な入試制度がある。また、外国語に力を入れており、英語、ロシア語、中国語、フランス語、日本語の 5 コースがある。日本語コースにおいては 1 月に日本に訪問するなどの国際交流も行い、言語だけでなく、歴史や文化にも直接触れる機会を設けている。生徒のほとんどが寮に入り、生活を共にしている。寮での生活は自分たちでルールを決めるなど、自治的な取り組みが随所に入れられている。

水原外国語高校は世界が求める人材（グローバルリーダー）を育成することをモットーに学校教育を進めており、共感する人材、成長する人材、挑戦する人材を様々なプログラムを通して育成しようとしている。教員も１００％選抜されており、目的意識をもって生徒のために意欲的に働いている。

Q&A より（抜粋）

Q：どのような教育理念で英語教育をしているのか。
A：AA プロジェクトを実践している。意欲ある生徒のために教師がカリキュラムを作っている。会話はネイティブの先生が行い、探求は韓国人教師が行っている。

Q：女性教師が多い理由と教員の異動の仕組みを教えて欲しい。
A：女性が 8 割。教育大学の入学者も女性が大半を占めている。勤務校は希望できる。一般的に３０％、本校は１００％その学校で選抜できる。

Q：寮生活で問題は起こらないのか。
A：寮には担当官がいる。1 部屋に 6 人住んで、最初は問題が起こることがあるが、担当官が厳しくチェックし、自分達でルールを決めて生活をしている。

7 月 11 日（木）　仁川国際高等学校訪問（仁川広域市）

訪問スケジュール

14:00　　学校到着
14:00 － 14:30　歓迎式・学校紹介
14:40 － 15:10　ユネスコ部の活動参観
　　授業参観
15:10 － 15:30　学校見学
15:40 － 16:00　休憩
16:00 － 16:30　教職員懇談会
16:40　　学校出発
17:00 － 18:30　夕食及び教師間の対話

科学の授業見学

学校・機関の特色

国際法、国際政治、国際関係および国際経済などの、国際学を学べる全寮制の公立特殊目的高校である。生徒は学力選抜により入学している。仁川国際空港に隣接する国際拠点地域として、グローバル人材の育成に特化したカリキュラムで運営している。英語を中心に外国語能力を強化し、優秀な学生を育て上げ、偏差値の高い大学に多くの卒業生を送り出している。その実績から、学力において韓国で非常に高い評価を受けている学校の一つである。しかし、大学入試だけを目標にするのではなく、専門別の進路探索などの主体的な活動も重視している。

参加者の感想（抜粋）

●学校紹介ではグローバル人材の育成に特化したカリキュラムの説明があった。１年次には、かの有名なハーバード大学での特別講義を受講するなど、「グローバル・インパクト・プログラム」と呼ばれる高大連携を推進していることを知った。大学入試だけを目標にせず、ボランティア活動なども精を出すなど、ユネスコスクールとして、持続可能な地球市民教育を実践する強い姿勢を感じ取ることができた。

●学校見学では理科室の設備が特に印象的であった。大型テレビ、ＶＲメガネや、３Ｄプリンターなどが複数常備されており、韓国の教育現場において、ＩＣＴを活用した教育が進んでいることを実感することできた。日本でもＩＣＴ導入が推奨されているが、いまだに黒板とチョークを使ったアナログな授業が主流であり、今回の体験を参考に、日本でも活用方法を積極的に考える必要があると感じた。

●自分にとって大きなインパクトがあったことを述べる。それは強制的な自習が夜の１１時まであり、その後も４割の生徒が自主的に深夜の２時まで学習していると聞いたことである。生徒の健康面はもちろんのこと、そこまでの労力をかけながらも、学習面で成就しなかった場合は生徒のメンタルケアが大変なのではないか、と疑問に思った。また同時に、日本では学力の高い学校ほど、自主性が尊重されている傾向が強いため、その大きな違いを知ることができた。

7 月 12 日（金）　塩光中学校（ソウル）

訪問スケジュール

9:30 －　9:45 到着移動
9:45 － 10:25 挨拶・学校紹介
10:25 － 10:40 歓迎公演
11:00 － 11:45 授業参観
11:55 － 12:15 文化授業
12:15 － 13:00 教員懇談会
13:00 － 13:50 給食
13:50 － 14:00 感謝の挨拶・別辞

STEAM 教育の実践

学校・機関の特色

「善良で有能な人」の校訓の下、キリスト教教育を通じて人生教育強化（礼儀ただしさ、親孝行、社会的ボランティア）を実践している学級数 18 の私立学校である。

4 大ビジョン「キリスト教教育（人格や情操教育、生命尊重教育）」、「ビジョン教育（現場職場体験等による進路探索の強化）」、「エリート教育（自己主導学習による教育、地球市民教育）」、「グローバル教育（ボランティア活動や生徒自治活動、民主市民資質の育成）」を特色としている。これらにより、グローバル人材の育成を目指している。

現在はユネスコＣＣＡＰ協力学校であり、月に 1 回、6 回にわたりネイティブ教師が学校を訪問し授業を行う国際文化理解の授業を実施している。ブラジル、中国、インド、ポーランドなどから教師を迎えて実践した。また、ユネスコレインボー青少年クラブの活動では、グローカル世界へ文化発信をする取り組みを実践しており、今年は韓国の遊びや食べ物について YouTube で公開予定である。

1 年生は自由学期制を実施しており、8 つのプログラムを選択し学んでいる。

Q&A より（抜粋）

Q：勤務校で、自由学期制を取り入れようとしている。教材開発など、教師の負担や高校入試に向けた学力向上等の成果はどうであるか。

A：自由学期制は、自分の得意分野、好きなこと、真のアイデンティティを見つけることにとても有効である。これにより、自分の才能に合わせて高校などの進路選択をすることにつながる。授業の準備については、教材等は国が支援してくれている。自由学期制は 2015 年から始まり 2016 年には全校で実施がなされているため、結果はまもなく出ることになる。来年からは、自由学年制を導入することとしている。1 学期に 2 時間選択を実施し、進路を見つけるための活動をする。そして、その学びを 2・3 年生での学びへとつなげていく。

Q：どのような英語教育をしているのか。

A：2015 年から教育課程が改訂され、英語の 4 領域を融合した教育をしている。また、タブレット PC を用いて、興味・関心に合わせた授業を展開している。

7 月 13 日（土）　国立中央博物館（ソウル）

敬天寺十層石塔の前記念撮影

篆刻道具

2 パターンの印章

国立中央博物館は、龍山(ヨンサン)に位置する韓国の代表的な博物館である。韓国において最も大きな博物館であり、世界でも 6 番目の大規模な博物館である。国宝約 60 品や宝物約 80 品を所蔵しており、世界の有名博物館に肩を並べている。館内は 1 階の先史･古代館（旧考古館）・中･近世館（旧歴史館）、2 階の書画館（美術館Ⅰ）・寄贈館、3 階の彫刻・工芸館（美術館Ⅱ）・アジア館の 6 つのセクションから成り立っている。

A グループは、中世・近世室をさらりと見学した後、篆刻に取り組んだ。掘るための石は柔らかくとても掘りやすかったのだが、時間の関係で、器用な人は文字部分でない箇所を掘り、あまり器用でない人は文字の部分を掘って白抜きのハンコを作ることになった。なお、印はそれぞれ自分の苗字をハングルに変換したものである。掘る前に篆刻についての知識を一通り身に着けた。

B グループ

7 月 10 日（水） 松林小学校訪問（水原市）

訪問スケジュール

10:10 – 10:30 歓迎式および学校紹介
10:50 – 11:30 授業参観
11:30 – 12:00 授業見学
12:00 – 12:40 昼食
12:40– 13:00 記念撮影、訪問終了

学校給食の風景

学校・機関の特色

松林小学校は"青い夢を抱いて明るく育つ松林子どもという教育ビジョンに基づき、体験学習を通じた進路教育の強化、学生自治会の主導のスポーツリーグ戦の活性化、文化芸術人格教育、父母と共にする地域社会運営など、一緒に学んでともに成長し、自分の夢を育んでいく幸せな松林教育を実践している。

Q&A（抜粋）

Q: ユネスコクラブの取り組み状況とその準備や負担と費用について
A: まず、1 年間の活動計画を立て、その後、担当のクラブを教師がそれぞれ選択し担当している。計画を立てるのが大変だが、キャンペーンやブース活動を通して楽しく活動している。予算は別枠で確保されており、年間 4 百万ウォンの補助が教育支援庁からあるので保護者による費用負担はない。

Q: 水原華城の価値継承教育と普遍的価値について
A: 文化遺産から普遍的価値を見い出すため、王の正祖の「孝」に対する思想や科学的な見地に立った設計思想などを学習させ、後世に伝えるべき価値に気づかせることが重要。

Q: 授業で使用していたデジタル教科書の活用状況について
A: 昨年度、1 万 5 千校の中から千校のパイロット校に選ばれ、80 台のタブレットが配布された。Wi-Fi は既に設置済みで、同時に 3 クラス程度は使用できる状況。科学・数学・英語の授業はデジタル教科書を使用しており、数年後には全校の学校に配布される予定。

7 月 11 日（木）　江原明震学校訪問（春川市）

訪問スケジュール

13:30 – 14:00　学校紹介
14:00 – 14:30　歓迎音楽会
14:30 – 15:10　授業見学
15:10 – 15:40　教師懇談会
15:40 – 16:00　写真撮影・記念品贈呈
16:00　　学校出発

学校紹介の様子

学校・機関の特色

江原明震学校は 1954 年に開校して以降、65 年の歴史がある私立視覚障がい学校であり、江原道で初の特別支援学校でもある。生徒は視覚障がいの限界を克服し、自活の意思をもって自主的に生活を送ろうとしているという特徴がある。また、個人の才能を活かし、生徒全員が楽器を弾けるように訓練をしたり、英語キャンプなどの活動に外国人と共に参加するなど、潜在的な才能を引き出すようにしている。さらに、生徒は不断の努力の結果、大学に進学して一般の教師や特別支援学校の教師になったり、社会福祉士などの資格を取るなど、それぞれの分野で活躍している。遠方に居住する生徒のための寮のような施設に住んでいる生徒もおり、保護者の教育活動への参加はなかなか困難なこともあるが、保護者の子どもの教育についての関心度は高いとのこと。

Q&A（抜粋）

Q：　重複障がいの子どもが増えていて視覚障がいの子どもが減っていると仰ったが、インクルーシブ教育等によって視覚障がいの子どもが減っているのか。

A：　視覚障がいの生徒が減っているのは本校だけでなく、一般の学校や全国の特殊学校でも同じであり、一つの要因としては医療技術が進歩したことが挙げられ、視覚障がいになる前に治療をしているなど、視覚障がいのみを持つ子ども自体が減っていると考えられる。また、視覚障がいのみを持つ子どもが一般校への進学を望むようになり、一般校へ進学するようになったのが二つ目の要因と考えられる。

Q：韓国の通常の学校では自由学期制度やキーコンピテンシーの導入など新しい教育改革を行っているが、特別支援学校でもそのような流れはあるのか。

A：自由学期制度の導入は、本校でも 2016 年にパイロット校として指定され試行している。特別支援学校でも自由学期制度を運営するためのベース作りが始まっており、学校でも今年から全面的に導入することになった。

7 月 12 日（金）ソウル青坡小学校訪問（ソウル）

訪問スケジュール

10:00 – 10:20 写真撮影
10:20 – 10:50 歓迎式および学校見学
10:50 – 11:30 授業見学
11:30 – 12:20 昼食
12:20 – 13:00 ワークショップ
13:00 – 15:00 評価会
15:00 – 17:00 自由時間
17:00 – 18:30 夕食及び教師間の対話

文化授業に熱心に耳を傾ける児童

学校・機関の特色

1943 年に設立された 77 年の歴史ある伝統校である。グローバル人材育成に向けた地球市民教育、創意融合人材教育、読書教育等を通じた創造的な思考力の育成を特色とした教育を実施している。

同校は様々な活動を行っているユネスコスクールであり、各種キャンププログラムや関連機関との連携プログラムなどの多様な地球市民教育プログラムを運営し、実践的な地球市民教育（GCED）を行い、教育課程の連携プログラムを通じて児童の地球市民意識を醸成している。また、GCED Gallery と呼ばれる施設も設置し、地球市民教育の教育環境を整えている。

Q&A（抜粋）

Q：担任の教師が全教科を教えているのか。
A：一部の教科については教科担任制である。

Q：普通の学級で発達障がいを持っている子どもの人数はどれくらいか。
A：20 分の 1～2 人ほどいる。放課後に特別支援相談を実施している。

Q：年齢層の高い教師は英語を話せるか。
A：ソウル市では教採試験で英語の試験を 15 年前から行っており、研修の機会が多い。

Q：韓国の教師は 4 時半には帰宅できると聞くが。
A：長期休暇中に自己研修をしており、研修情報は教育庁が提供してくれる。

7 月 13 日（土）　国立中央博物館（ソウル）

展示仏像

螺鈿細工制作の説明を聴く教職員

ソウルにある国立中央博物館は、韓国の代表的な博物館である。9 万 3 千坪の敷地内には、韓国だけでなくアジア文化をも網羅した 1 万 5000 点の遺物がずらりと展示されており、国宝約 60 品や宝物約 80 品を所蔵している。考古学、歴史、美術、アジア関連の文化財を展示する常設展示館、多様な展示が可能な可変性に構成された企画展示館、体験や参加学習を通じて展示が理解できるように設計された子ども博物館、博物館野外庭園を利用いた多様な石造作品が展示された野外展示室から成り立っている。

まず、博物館では、B グループは文化体験として「螺鈿（らでん）」と呼ばれる貝のパーツを貼り合わせて模様にする貝細工のコースターの製作を行った。細かな作業に四苦八苦しながらも、その作業を体験することで、韓国の伝統工芸が有している精緻さへの理解が深まった。その後、韓国人の学芸員の方のガイドのもと、旧石器時代から朝鮮王朝時代までの韓国の歴史を彩る重要文化物を見て周り、韓国の歴史についての学びを深めた。

7 月 14 日（日）　韓日教師教育フォーラム（ソウル）

テーマ：「韓日両国の教育関係の協力案」
　　―教師交流を中心に
座長：　イ・ソンギョン
　　（清州教育大学師範大学科学教育科教授）
パネラー：キム・チャンヨン
　　（ソウル青波小学校）
　　キム・ユギョン
　　（鹽光中学校）
　　陣野 俊彦
　　（東京都立大島海洋国際高等学校）
　　久次米 晶文
　　（上板町立高志小学校）

パネルディスカッションの様子

パネルディスカッションを通じて日韓両国から出た共通の悩みとして、国際交流に関心がない教師にどう働きかけるのかという点があった。それに対して両国の討論者が自身の経験と共に、下記のような具体的な方法を提案した。参加した教職員からは、国は違っていても直面する問題は同じであり、遠く離れた国に同じ悩みを抱える同志の存在を認識することでモチベーションの向上につながったとの声が聞かれた。

提案「具体的な方法」（抜粋）

① キム・チャンヨン
提案：国際交流に関心を持っていない先生に対して、ユネスコの理念を広げることが大事である。具体的には、一緒に寝泊まりをしながら 3 泊 4 日を深く過ごすことによって、現地の学校の教師と密に話すことができると思う。

② キム・ユギョン
提案：一過性の交流ではなく持続的な交流のプラットホームを整えることが大事である。具体的には、両国の教員同士がメールで指導案を送って情報交換を行ったり、スカイプで子供たちが交流したり、教員の授業交流の場を設けたりといったことである。

③陣野 俊彦
提案：教員間のコミュニケーションを持続させる方法を 3 つ挙げるとしたら、
①スカイプなどで韓日の合同授業や SDGs を達成するための共同プロジェクトを組む。
②「韓国修学旅行の提案」：国際交流に興味を持っていない先生を韓国修学旅行の引率に任命することで、国際交流に興味を持つきっかけを作る。
③「五感を活用した教師間交流」：言葉を交わすだけでなく、歌やアクティビティを取り入れたり、料理を食べたりしながら交流することでより親密に交流ができる。

④久次米 晶文
提案：具体的にはコンセンサスゲームの一種である NASA ゲームを提案する。NASA ゲームとは月に行ったと仮定し、着陸地点から 300km 離れた母艦に行くための 15 個のアイテムにグループで話し合ってランク付けをするゲームである。このゲームは個性と文化がよくでるので意見をまとめることが難しく、そのような意見の対立を通して相互理解が深まると考える。

7 月 14 日（日）　報告会（ソウル）

A グループの発表

報告会では、評価会での話し合いを基に、訪問先から得たことや本プログラムに係る成果についての報告が各グループから行われた。

A グループの報告は、本多光先生が代表して行った。韓国の教育施策について、学習内容そのものを教えることを目的とした教育ではなく、学習内容を通して何ができるようになるかという生徒の資質・能力、コンピテンシーを育む教育へと転換しようとしている学校を視察し、日本がこれから進むことになる教育の未来像を見ることができたと述べた。また、STEAM 教育やキャリア教育を始めとする教科横断型の授業の展開方法、ICT を始めとする学校教育設備の充実等、これから日本が議論すべき内容が韓国では既に具体化されていることに驚くとともに、これからの日本でこれらのことを具体化していくためのヒントを得ることができたと述べた。

最後に、日本に帰国後、本プログラムで得られた知見を学校現場の教職員と共有し、生徒たちのためになるように還元すること、また、インターネットを活用し、日本と韓国との交流授業を通して、改めて両国を理解し合い、互いのことを知ることの大切さや知るきっかけを与えることが地球市民教育の第一歩につながるのではないかと考えられるため、今後も交流する機会を作り続けていきたいと述べて、締めくくった。

B グループの発表

B グループの報告は、朝日仁美先生と成田潤也指導主事が代表して行い、訪問を通して学んだことを 3 つ挙げた。1 つ目は、韓国の教職員の方々が自信と意欲にあふれているということを挙げ、その背景には、それぞれが自分の専門性を自覚して働くことができているということがあり、これを促進する環境も整っているからではないかと考えを述べた。2 つ目は、教職員の研修体制が充実しているということ。様々な研修の中から、自分の興味関心の高いものを自主的に選んで参加し、自己研鑽に励むことができ、その結果、教職員の学びの充実が、子どもたちの学びの充実につながり、よりよい教育的効果をもたらしていると感じたと述べた。3 つ目は、人的・物的リソースが充実していることを挙げ、教材、設備、スタッフが豊富に配置されているおかげで、教職員が教材研究や授業準備に集中できているのではないかという考えを述べた。

最後に、B グループ全員で本プログラムでの学びを、「みんなでつくろう、みんなの未来」という言葉でまとめ、激しく移り変わる時代を生きていく子どもたちのために、何かを成し遂げようと思うなら、大人が共通の願いを持つこと、そして、それを絶えることなく、次の世代に受け継いでいくことが大切だという結論を述べて、報告を締めくくった。

7 月 14 日（日）　　閉会式（ソウル）

日本訪問団代表としての答辞

記念品交換

閉会式では、今回の訪問受入れ校であるソウル青坡小学校のユン・ヒャンオク校長からご挨拶があり、それに対する答辞という形で日本訪問団を代表して奈良育英中学校・高等学校教頭の立花宏介団長が挨拶を述べた。1 週間があっという間に感じるほど中身の濃い充実した時間であったと述べ、今回の訪問に際して素晴らしいプログラムを準備いただいた、KNCU をはじめ、教育庁の皆様や多くの関係者の皆様に対して感謝の意を表した。

そして、今回訪問したそれぞれの学校では、多種多様な教育活動が行われており、それぞれの学校で貴重な時間を過ごすことで、韓国における ESD のあり方や、各学校の建学の精神に則った特色ある教育内容を拝見できたことは、訪問団一同、日本に帰国してからの教育活動における大変重要な示唆をいただけたことに違いないと述べた。

最後に、子どもたちが未来をたくましく生き抜いていく力を身に付けることができるように、教職員が固定概念から脱却し、人間らしい、人と人との心のつながりを大切にしながら、学びを続けていく必要があると考えられることから、今回の訪問が教職員の狭い固定概念からの脱却となり、世界基準で広く心と心のつながりを感じる素晴らしい機会となったことに感謝するとともに、今後も日本と韓国の教育交流にさらなる力を尽くし、世界の子どもたちの未来が素晴らしいものとなることを祈念するとして、挨拶を締めくくった。

３．成果と今後への活用

A-01　立花 宏介

（奈良育英中学校・高等学校教頭）

「出会い・発見・可能性」

６月にユネスコスクールの申請をし、チャレンジ期間として歩みだしたＥＳＤヨチヨチ歩きの本校にとって、今回ご一緒させて頂いた先生方から学校での取り組みを聞かせて頂くことや、訪問させて頂いた学校の取り組みを拝見することは、まさに宝箱を覗き込むような感覚でした。中でも訪問校が取り組んでおられた模擬国連の様子は、本物の議場を感じさせる教室環境もさることながら、生徒たちがその国の代表としてしっかりと意見を述べている姿には驚きを隠せませんでした。仁川国際高校においては、討議はもちろんのこと、教室内を自由に移動して議論する非着席討議においても英語が使われていたことには、ただ唖然とするのみでした。模擬国連そのものが全く未経験だった私にとっては、生徒たちがとても神々しく思えてなりませんでした。もちろん、国内においてもすでにいろんな取組みがなされている内容ではありますが、本校にとって「何を」と悩み続けていたところに一つの道筋を見出せたような気がします。この機会を得ることができたことに多いに感謝したいと思います。

今後の活動予定

●今回の訪問で得られた韓国教育界の現状とその先進的な実践内容、及びその具現化に向けた計画等をしっかり周知し、新しい時代への教育転換の意識を高めるとともに、本校の教育活動において具現化できる内容をしっかり精査し、その取組みを進める。

●（仮称）ユネスコ部を創設し、掲示物や文化祭発表など様々な取組みを進めることでＥＳＤの意識を学校全体に広める。また、模擬国連の参加を目指しその取組みを進める。

A-02　本多 光

（兵庫県立川西明峰高等学校教諭）

（写真左から２番目）

教師の使命とは、全ての子どもたちが未来社会をより良く生きることができるようにすることである。このプログラムを通して確信できたのは、教師の本質である。訪問した全ての学校で、生徒たちは勉学に人生を捧げていた。その懸命な姿には、韓国と日本の違いなど全く感じなかった。そこには、今を懸命に生きる生徒の姿があるだけだった。その生徒を守り、未来へと導くことが我々の使命である、と確信した。このプログラムに参加する前は、日本は日本、韓国は韓国と分けて考えていた。それどころか、韓国の教育から使えるものは日本の教育でも使ってやろう、という狭い視野で考えていた。しかし、このプログラムを通して、国境を越えて、日本と韓国、さらにはもっと多くの国々と協力して、次世代の子どもたち全員を良い未来へと導くことが大事なのだと実感した。今後は世界全体の教育というグローバルな視点を持って、関わる生徒を通して、全ての子どもたちが良い未来社会を生きることができるように支援していきたいと思う。

今後の活動予定

●職員向けの研修会の開催
●韓国の指導案を自分の高校でも実施できるようにアレンジし、実践
●韓国からの留学生を受け入れ、文化交流をする
●学校説明会で、保護者や地域の方々にも韓国の教育事情について説明し、相互理解を図る。
●韓国からのホームステイを受け入れてくれるホストファミリーを募集する。
●本校が実施している、地域と学校が連携した授業「明峰の学び」で、韓国についての講座を開講する。

A-03　川本 明香

（大阪成蹊女子高等学校教諭）

（写真左前）

私は、私学の高等学校で９年間勤務している。教員の移動はほとんどなく、長い時間を共に共有しているので、とても働きやすい環境であるが、他の学校の先生との交流などはほとんどなく、特に、今回のように、公立の学校の先生や教育委員会で働く方々との交流は新鮮であり、大変勉強になった。

ユネスコスクールの訪問や、文化施設の訪問も、個人旅行では、訪問することができないところに行くことができ、韓国の教育の現状を知ることができたのも、良い経験になった。また、韓国の教員とも、蜜にやりとりができたのも、良い経験になった。

その後での公式な場の討論会でも色んな意見を聞くことができたが、一日のプログラムが終わった後のプライベートな時間に、他の先生方と、お話した内容のほうが、その先生方の人となりや教育に対する熱い思いを聞くことができ、私にとっては大きな財産となった。

同世代だけで交流するだけでなく、この期間中は、あらゆる年代の先生方と交流するよう心がけるようにし、教科や、地域の文化などをリスペクトし合える関係になれたことが、この研修での一番の学びとなった。

毎日毎日、大笑いをした、奇跡のような日々を自分の誇りにし、これからの人生に活かして生きたいと思う。

今後の活動予定

●わたしの学校では、偏差値は高くないけれど、社会に出た後にどうつなげていくかを６つのコースに分かれ、勉強をしている。いつどこで何によって本当の意味で学びたいと思えるかは人それぞれなので、何かのきっかけになるように美術教育をしていきたいと思う。また、日本でも、美術を重要度の低い教科ととらえられている現実があるので、そこを少しでも変えていきたい。

●本年度から、介護老人ホームの方々を迎え、生徒たちと、ものづくりを通して交流を行う予定があるので、今回の研修で学んだことをいかして、どのようにすれば伝わりやすいかを考えさせ、実施していこうと思う。

A-04　神内 千波

（大阪教育大学附属高等学校池田校舎教諭）

（写真中央）

「私の夢は…」

本プログラムでは、３校のユネスコスクールに訪問させて頂いた。どの学校でも印象的だったことは、生徒がそれぞれ自分の将来の夢を持ち、努力している姿であった。例えば、「日本の大学に行きたい」や「将来は、日本で宇宙に関わる仕事をしたい」など、中には熱く夢について語ってくれる生徒もいた。各学校で掲げる教育目標は異なるが、どの学校も世界的視野を持つ生徒の育成を掲げながら、進路探索(キャリア教育)に力を入れていた。生徒自身で夢や目標を持つことで学習意欲も高まり、その中で生徒の自主性を重視した協同プロジェクト学習が行われていた。

プログラム４日目に訪問した藍光中学校では、教科連携選択プログラムの一つとして、英語で各分野の著名人について調べるキャリア教育の授業を見せて頂いた。日本でも、教科横断的に教科で身につけた力を活用することが重視されており、カリキュラムの組み立て方など示唆を得ることが出来た。また、授業者の先生は英語の先生なのだが、英語だけでなく世界の様々な問題についての勉強をしているとのことで、教科横断的な学習が求められている今、教員も自身の専門分野だけでなく広い視野を持つことが求められていることを強く実感した。そういう意味でも、本プログラムは、韓国の教育を理解することで、日本の教育の課題や良い点を見つけることが出来、非常に視野が広がった貴重な体験だった。ぜひこの体験を活かし、自身の勤務校の生徒に還元したい。

最後に、このプログラムを通して築けた日本全国の先生との関係も大切にしていきたい。貴重な勉強の機会をありがとうございました。

今後の活動予定

●韓国の学校の先生直接お話する機会を持つことで、個人的な繋がりを持つことにも繋がった。ぜひ、教員間の繋がりだけではなく生徒同士の繋がりも実現させたい。

具体的には、３校目に訪問させて頂いた藍光中学校の英語の授業の中で、世界の問題として気候変動の問題に取り組んでいるとのことであった。本校でも１年生の現代社会の授業で同テーマについて学習し、解決策を様々な国の意見を踏まえて考え、ペアでポスター作りを行っている。ぜひこのポスターを見て頂いて、日本の学生が考えた解決策について外国の視点からコメントを頂きたいと考えている。このように日本の学生と韓国の学生が学習を通して繋がる機会を持ちたい。

A-05　大川 沙織

（立命館宇治中学・高等学校教諭）

（写真右手前）

「知的好奇心を満たし、学校教育や国際平和を考えた１週間」

全国津々浦々から約 50 名の教育職従事者が集まり、韓国の教育現場を視察するという非常に貴重な機会を作ってくださったユネスコアジア文化センターに感謝したい。

海外の学校制度を知り、学校を視察したことで、最も興味深かったのは、教育行政だった。韓国は現政権下で教育に対する財政支出を増加させている。韓国の教員と交流する中で、教育に対する財政支出が少しでも多く、行政が教員を支援する体制を整えていけば、教育現場に物理的・精神的な余裕が本当に生まれるのだと確信した。国や地方公共団体が、教員を疲弊させずに教育活動に従事させるサポート体制を打ち出していることに驚きを隠せなかった。こうした政策が迅速に実現される（また、転換されてしまうのも早いと聞いたが）のはなぜなのか、とても興味を持った。

通訳の方の力を借りて、韓国の教員や生徒と意思疎通を図ったが、やはり少しなりとも韓国語を勉強して質問できるようになっていたら、より多くの情報、より多くの生の声に接することができただろう。語学学習も国際平和につながっている、そう確信したプログラムでもあった。

今後の活動予定

●私はいま、高校の地理Ｂと現代社会探究、中学校の地理を担当している。今回のプログラムでの経験は、すべての担当科目に活用することができる。高校地理Ｂの東アジア地誌学習で、韓国の高校生と日本の高校生をスカイプなどでつなぎ、相互に学校生活など身近なことを交流する。もしくは、SDGｓを扱う単元で、東アジアの国同士で国際的な問題にどう協力できるかということを交流する。（中学生もまた同じ）高校現代社会探究では、日韓両国がともに直面している少子高齢化問題への対応策を、日韓双方の家族、社会文化の違いを理解しながら交流する、など。

●今回のプログラムに参加したことを市民も含む教育研究サークルで発表し、日本の教育の在り方などを考えるきっかけにする。教育のみならず、韓国の生活を知り、韓国を理解するという方向の講演も可能である。

A-06　奥川 美希

（奈良市立京西中学校教諭）

（写真左）

「世界を見る「目」」

私にとって、今回が初めての訪韓だった。韓国についての知識はほとんど無く、他国に対して閉鎖的な国だ、とまで思っていた。しかし、現地の生徒に日本語を勉強している理由を尋ねてみて、「日本に旅行したとき、日本人がとても優しかったから」「日本語はかわいいから」というように、日本に対して好印象で、高い関心を持ってくれていることがわかった。また、街の散策中、以前日本に住んでいたので関西弁を話せるという人や、日本の歌が大好きだという人にも出会い、民間の人々がとても友好的であることも実感した。同時に、閉鎖的な考えなのは私の方だった、ということに気づかされた。そして、部分的な報道にとらわれず自分の「目」で見て感じること、その国の文化・歴史・価値観をきちんと理解しようとする「目」を持つことの重要性を強く感じた。

韓国の人とはもちろんのこと、日本各地の個性あふれる先生方との交流も楽しみつつこのプログラムに参加させてもらえたことは、これからの私自身の考え方に大きな刺激を与えてくれる、貴重な経験となった。

今後の活動予定

●学校での職員研修の機会に、今回の活動の流れやそこから得られた情報について発表し、「開かれた教育」の方法について本校職員自身が考えるきっかけをつくりたい。

●中学校社会科担当として、文化施設探訪で新たに得た知識や、現地を歩いてみて感じた町の様子、そこから推察できる韓国の社会情勢について、写真などを活用しながら生徒たちに伝えていきたい。

A-07　金宮 嗣允

（大阪学芸中等教育学校教諭）

（写真左）

「地球市民教育」を基盤にした「主体的・対話的で深い学び」

今回、水原外国語高校、仁川国際高校、そして鹽光中学校の３校を訪問する貴重な機会を頂き、特に印象に残ったことは、３校とも生徒の皆さんの自由、「好きな学習を好きなだけできる自由」が尊重され、さらに、生徒同士がお互いに相手を尊重し合っていることである。協力して校内案内をする生徒の助け合いや、グループワークで意見を共有に努める態度を見るにつけ、寛容で包括的な関係を作ろうとする姿勢が基本的にできていると思った。だから、発表や討論が上手くできるのだと強く感じた。また、韓国の教職員の方々との対話を通して感じたことは、「主体的・対話的で深い学び」が降りてきた教育政策というよりはむしろ、教育制度上の問題点の改善に必要であり、地球市民教育には不可欠であるという共通認識のもとで実践されていることである。高い専門性、質の高い授業を提供するための準備、私自身にとって見習うべきことばかりで、それらの積み重ねが韓国の優秀な中高生の育成に繋がっていると思う。

今後の活動予定

●管理職との相談結果次第だが、校内での教職員対象の報告会の実施、または、報告書の回覧。授業では、本校生に同年代の韓国の生徒の様子や、学校の様子を正確に報告。さらに、鹽光中学校で見学した、職業探索と英語の融合授業を実践してみたい。

●私自身、個人的に「エリーニ ユネスコ協会」に所属しているので、定例会等で発表したいと思う

A-08　平岩 尚子

（AICJ 中学高等学教諭）

「「自由学期制」の感動」

私が今回訪韓し、韓国の学校現場を見させていただいたり韓国の先生と話をさせていただいたりして興味を持ったのは、自由学期制です。 日本の学校はアクティブラーニングという主体的に生徒が取り組む学びの方法を取り入れていくという授業も実施されている学校もあるが、韓国では教育政策として自由学期制の中で既に行われていました。

自由学期制の中で、生徒たちは自分たちの関心の内容を自分たちの意思で決定し、決めた内容を探求していく。自分自身の将来に繋がるもの・職業についても探求することで、以降の学習意欲の向上にも繋がっている。よって、韓国の生徒は教科の授業も放課後の活動も主体的に取り組むことが自然とできているとのこと。このような主体性を育むことのできる「自由学期制」のシステムの利点を、道徳・総合の授業で行っているアクティブラーニングへ取り入れることができないかを授業計画を立てる中で常々考えていきたいと思います。

今後の活動予定

●担当する中１の道徳の授業にて、２学期以降も国際理解を題材とした内容を扱います。
そこで韓国の中高生の学校での活動の様子を撮らせていただいた写真や交流させていただいて聞くことのできた話をまずは伝えていこうと思います。
そして、藍光中学校で行われていた自由学期制の中での「英語でのキャリア教育」を道徳内で取り入れようと思っています。自分が将来考えている職業についてより深く知り、将来の見通しを立て、日頃の授業の取り組みの意識を改革できる方法として、とても感動しました。

A-09　高村 克徳

（北海道札幌市立篠路西中学校教諭）

（写真右から２番目）

「国際交流の大切さ」

本プログラムを通して最も感じていることは、自分の常識と世界の常識が大きく乖離していることである。今回の研修期間中、韓国の教育制度を知ったり、教育現場を見たりしたことで、新しい発見が多くあった。韓国の教育制度は非常に合理的であり、教員にとっても生徒にとっても目標を明確にもちやすいものであった。目標に向かって何をすべきか、何をしないべきかが明確になっていた。また、訪問したすべての学校で生徒に世界市民への意識をもたせる教育を行っていた。日本でも同様の教育を行っている学校はあるが、広く一般的なものにはなっていない。日本の学校の多くは韓国のように学校ごとにカリキュラムや方針を決められないので、学校として一枚岩で教育を進めることが難しいのである。本プログラムを通して、日本の教育制度の弱点を知ることができたとともに、国際交流の大切さを学ぶことができた。

今後の活動予定

●教員の業務の合理化を図りたい。

●生徒に世界市民としての自覚をもたせられるような授業を研究したい。

●講話などの機会があれば、本プログラムで得られた知識や新たに生まれた考えなどを発信したい。

A-10　亀田 涼子

（青森県立青森東高等学校教諭）

（写真右）

「世界に通用する人材を育てるために」

今回のプログラム全体を通して最も有意義だったことは、韓国の教育の現場を直に感じることができたことである。私自身は勤務校が普通科の進学校で、国際バカロレア教育認定やSGH 等の指定を受けているわけではないため、そもそも国際教育という観点をどのように勤務校に取り入れられるのかを終始考えていた。プログラム中に訪問させていただいた高校はどちらも国際教育を先進的に行っていたため、授業も課外活動も全てがグローバルだったように思う。何よりも、先生方が「世界に通用する人材を育てる」というビジョンと熱意を持っていることに感銘を受けた。そしてそれが、国の財を人材とし、その人材を育てる教育を重視する韓国の政策に裏付けされているのだと知ることができた。他国を知ることで自国がより見えてくる。個人レベルの交流から視野が広がっていく。そういう視座を持ちながら、今後我が校にどういった形で国際教育の観点を取り入れていけるのかを模索していきたい。

今後の活動予定

- ２年次後期に総合的な学習の時間の中で実施する課題研究において、SDGs を研究テーマに据えて行う。そのオリエンテーションの際に今回のプログラムの報告も絡めて説明を行う。
- 近隣の他校のグローバル教育推進校と協働した活動を行う。

A-11　森田 真広

（岡山龍谷高等学校教諭）

（写真左）

「日韓の違いを知る」

「日韓の違いを知る」この何気ないことこそ、今回のプログラムの大きな意義だと感じた。教育現場を肌で感じ、教育の変化のスピード、教員の働き方など、何もかもが日本と全く違った。時には、現在の日本が理想と掲げていることを、すでに実践しており、少し焦りも感じた。だが、この違いを知り、実際に良い所をすぐに現場で取り入れていけるかというと、それは難しい。国家レベルでの変化がない限り、大きく変われないことが現実だ。

しかし、この訪問団が、ここで学んだ事を共有していくことはできる。少なくとも、このプログラムに参加し、意見を交わす中で、無関心だった人はいなかった。この考えを持つ人が増え、それを何らかの形で日本の教育現場に伝播することで、きっと今回得た韓国の良い所が、還元されていくように思う。そういう意味で、教育だけでなく、文化、食、言語など、あらゆるジャンルで「日韓の違いを知る」ことができたこのプログラムは、教育現場に携わる私たちの成長を大きく促したと思う。それぞれが、周囲と共有し、現場に還元されていくことを期待したい。

今後の活動予定

●教職員研修

職員会議の場で、今回の報告を行う。韓国の教育現場が良いと思える所は取り入れていき、結果として悪いと思える所も伝えることで、実践の参考にしてもらいたい。

●授業の実施

生徒へ授業で還元していきたい。隣国はどのような教育を行っているか、どのような文化があるのかを、授業を通して伝えていきたい。特に社会科教員であるので、韓国を取り上げることが多い。その際、今回の体験から、具体的にわかりやすく伝えられる経験を得た。

●ＣＳＲ活動

ＣＳＲ活動で、中学校、小学校へ出前授業をする機会がたまにある。韓国だけの特集となると難しいかもしれないが、近隣諸国の教育や文化というテーマで話すことができる。世界にはこんな教育を受け、こんなことを志している学生がいるという内容でコンテンツを作り、今回の体験を共有していけたらと思う。

A-12　別府 信一

（高知県立高知東工業高等学校教諭）

「２回目の韓国」

今回の訪韓は、日韓スポーツ交流事業でバレーボールの部に出場して以来２回目で、教育機関の訪問だったこともあり、大変楽しみにしていた。

水原外国語高等学校の校長ドンシン・セオ先生との出会いでは、何気ない日常の中に美を見出しながら仕事に励んでおられる姿に触れることができたし、水原教育支援庁の訪問では、施策を推進するにあたっての思い切りの良さを新鮮に感じた。人事権の割合が学校によって異なり、普通校は教育委員会と校長で 70:30、訪問校では 100:0 や 0:100 であると聞いた時には大変驚いた。また、訪問校の生徒の討論の水準の高さには衝撃を受けた。彼らがそのまま育っていけば、将来は交渉の場での大きな戦力になるだろう。人の幸せということについても改めて考え、帰途に就く頃には、彼らが損得勘定の世俗に毒され過ぎることのないよう、他を慈しむ心を損なわないままで人生を送られるよう、祈りたくなっていた。

最後にもう一つ、訪問団メンバーの進取の精神にあふれた活力の高さにも感じ入った。おかげで８日間の毎日を刺激的に過ごすことができ、大変ありがたいことと思っている。

今後の活動予定

●生徒に対しては、すでに授業を担当している全てのクラスで、また、担当部活動でも韓国訪問の際の話をした。これからも折に触れて話をするつもりである。
教員に対しては、職員会終了後に行われる「研修棟報告会」の中で、本プログラムで得た学びや成果を紹介する予定でいる。時期は２学期を考えている。
また、所属校では、昨年に引き続き今年もソウルの柳韓工業高等学校からの短期留学生を迎える予定である。本プログラムを経験したことにより、昨年よりもいっそう親しみを感じつつ迎えることができるのではないだろうか。

●韓国を訪れた人は数あれど、学校や教育委員会を訪問した人はごく少数に限られている。本プログラムでは、観光では決して知ることのできない韓国の一面に直接触れることができた。韓国の話題が出てきたときには、この経験を紹介できる。

A-13　近藤 和久

（愛知県立足助高等学校教諭）

「「部活動の意義」を再度考えるきっかけに」

今日の日本では教職員の多忙化が問題視されており、その一因として授業後の部活動指導がある。私自身も、高校で陸上部の顧問をしており、最大で年間２３大会の引率をした経験があり、その年は本当に疲労困憊であった。したがって、韓国に部活動がないことには驚くとともに、大変魅力的な教育システムであるように感じた。水原外国語高校でも、授業後の部活動がないおかげで、教職員は早く帰宅できるとお聞きし、羨ましくも思った。しかし、中学、高校で勉強に専念したが故に、運動する習慣が身につかず、韓国では生涯スポーツの普及が進んでいないように思う。それは、朝晩の自由時間にソウル市内をランニングしていて、日本と違い、周りに走っている人が全くいないことに違和感を覚えたことに起因する。一方で歩行者の数は尋常でなく、健康意識は高いものの、学力優先のカリキュラムの影響からか、将来的な運動（スポーツ）の種目の多様性には乏しいことを肌で実感した。このような体験から、何事にもメリット・デメリットは表裏一体で存在することを再確認した。今後の日本での教育活動現場においては、今回の研修で学び得た知識・経験をフルに活用していきたいと強く思う。

今後の活動予定

●本校の教職員に向けて

「日本と韓国の教育の相違点」に関する講義を実施。

・日本：新学習指導要領、大学入学共通テストの事例を用いて

・韓国・自由学期制、内申点重視、特殊目的校などの事例を用いて

●８月に行われる愛知教育大学と本校の国際交流事業において、留学生が本校生徒、教員、地域の方に母国紹介をする場面があり、そこでは、今回の韓国研修で学んだことの発表を行う予定。

A-14　横井 尚美

（愛知県教育委員会主査）

（写真右）

「好きこそ物の上手なれ」

韓国には、私的な旅行で何度も訪れていたが、新聞やニュースで日韓両国の問題が報道されるのを目にするたび「近くて遠い国」という印象をもっていた。現在の韓流ブームは高校生にとってはハングル習得の絶好の機会となっている。多くの生徒たちが、Ｋポップを入口として、韓国文化や、食事、言語に興味をもち、スマートフォンのアプリケーションをとおして、自らの意思で積極的に韓国の学生たちと交流し、友好を深める姿を幾度も目にしてきた。今日のＩＣＴの発展は、国際交流の壁を低くしている。

今回のプログラム参加による最大の学びは、「好きこそ物の上手なれ」ということわざに集約されている。交流した日本語を流ちょうに話す水原外国語高等学校の１年生の女子生徒は、「日本のアニメが好きで、夢は日本のアニメの舞台になった地を巡礼すること」と瞳をキラキラと輝かせて熱く語ってくれた。また、藍光（ヨングワァン）中学校の校長は、自身の娘さんが日本語や英語をマスターしたきっかけはアニメやドラマであったことを話された。

我々教師の仕事は、未来を担う子供を育てることである。そのために、生徒にとって最良の興味・関心を引く教育環境の提供や動機付けをし続けるための努力を日韓両国教職員の協力の下推進したい。

今後の活動予定

●当課では、県内全学校の管理職・教職員を対象としたＥＳＤ推進指導者研修会を実施している。この研修会では、「学習指導要領におけるＥＳＤの位置付け、カリキュラム・マネジメント、主体的・対話的で深い学びづくり、管理職として校内への働きかけの実際」や、「持続可能な社会を目指す行動者育成を目指したＳＤＧｓ教育の実践」について、講義・ワークショップを予定している。まとめとして、キャリア教育を始めとする教科横断型の授業の展開方法等、本研修で得られた知見を、現場の教職員と共有して、生徒たちの学びに還元する予定である。

●当課では、県の地域婦人団体連絡協議会の支援や、地域の女性リーダーを対象に「女性教育指導者研修会」を実施している。地域婦人団体連絡協議会は、活動目標に「ＳＤＧｓ」を掲げ、環境問題や国際理解教育、防犯・防災活動を推進している。毎月開催される県地域婦人団体連絡協議会の理事会や、「女性教育指導者研修会」において、研修内容で得られた学びや成果について共有するよう努めたい。

A-15　安田 亨子

（熊本市立桜山中学校教諭）

「直接の交流で得たもの」

私は、現在熊本県の公立中学校で、外国から来た生徒（日本語未習）に日本語を指導している。これまで中国、フィリピン、オーストラリアなどから来た生徒を指導していたが、今年は韓国からきた姉妹を指導している。彼女たちも日本語が上手になったが、私も彼女たちを通して韓国の学校の様子や文化を知ることができた。さらにこのプログラムで実際の韓国での授業の様子や韓国の先生方、生徒たちと交流することによって自分の視野を広げることができた。

まず、日本語を学習する生徒たちの様子である。最初に訪問した水原外国語学校では５つの外国語のコースがあり日本語を学ぶ生徒と話すことができた。わたしが話した生徒は日本のアニメが好きで映画「君の名は」を１２回見たと話してくれた。入学してわずか３ヶ月程度にもかかわらず、日本語でコミュニケーションをとろうという意欲がすばらしくあった。特に中学生、高校生については興味を持ったことや好きなことから意欲が高まるのだなと思った。自分の指導にも役立てていきたい。

次に、韓国の先生方との交流で教育現場についていろいろな話を聞くことができた。教育制度は大統領が変わるたびに入試制度を含めた教育政策が大きく変化するということを知った。韓国国内では教員に対する社会的地位が日本より高く、待遇も恵まれているように感じた。しかし、保護者からのクレームや新しい教育施策に対応することが難しいなど日本と共通するような現実の話も聞くことができた。今後の指導に役立てるとともに、国際交流で得たものを伝えていきたい。

今後の活動予定（抜粋）

●毎年、日本語を指導している在籍学校の先生方との連絡会を実施している。この機会に学んだことを生かして異文化体験プログラムを作り、よりよい学習支援ができるようにしたい。

●現在、日本語指導している生徒の指導に役立てる。何より自分自身が異文化体験したことは生徒理解につながると思う。生徒の感覚にぴったりくる例文をつくるのに役立てたい。

●日本と韓国の学校の違いについて生徒と一緒にまとめ、日本語教室の発表会で発表する。
（保護者、別の学校の外国ルーツの生徒、学校関係者、教育委員会参加）

A-16　中平 聖子

（長野県白馬高等学校教諭）

（写真右手前）

「国際交流から世界平和へ」

この訪問を通して、韓国に対するイメージが変わった。より身近な存在になり、メディアの報道ばかりを信じて、韓国に足が遠のくのはもったいないことだと感じた。実際に、韓国の日本語選択者や教職員との交流では、お互いを尊重しながら交流できた。教職員が日本の教育に興味をもってくださったり、日本語コースの生徒が流暢に日本語を話しているのを聞いたりすると、日本に高い関心を持ってくれることが嬉しく、このような経験の積み重ねこそが平和に続くのだと感じた。

また、韓国が教育においてこんなに進んでいるとは恥ずかしながら知らなかった。自由学期制の英語とキャリア教育横断型の授業では、ICT を駆使しながらグループで各自興味のある職業別に異なった英文を読んでいた。先生は生徒が興味を持つような工夫を随所に入れており大変勉強になった。

韓国の教育現場を実際に視察することができ、日本の教育の未来について考えたり、自分を省みたりする非常に有意義な体験ができて幸せに思う。今回得た経験を今後も広げ、国際交流の更なる推進に努めたい。

今後の活動予定

●７月中を目標に報告書をまとめ、共有する。Asian Language II（韓国語）の授業で、生徒に韓国の様子を伝える。
　８月の職員研修会で、報告と本校でできることを提案する予定である。
　12 月のマレーシアとの交流で、今回歓迎される側の立場になって感じたことを踏まえ、国際交流事業の企画を見直す。できれば SDGs をテーマにできればいいと考え中。
　本校の SDGs への取り組みを同僚と協力して推進する。

●HAKUBA SDGs Lab での活動の中で何かできればと考えているが、詳細は未定。

A-17　山口 晴敬

（北海道札幌月寒高等学校教諭）

「日本は自覚したほうが良い。教育後進国になり下がったという現実を」

「同じような文化を持っている日本と韓国。学校文化も似ているところが多い。」最終日に中央大学のキム・イギョン先生の講演からもそのような言葉が発せられた。しかし、韓国の学校を見た私にとっては、そのような感覚はなかった。日本の学校は遅れている。何がどうということではなく、すべてがだ。日本はことあるごとに精神性で教員や生徒を鼓舞する。「頑張りましょう」「一致団結」「仲良く」「思いやりを持って」。この 21 世紀を 20 年余り過ぎようとしている今でもその精神性が上位に来ることが学校スタンダードになっている。“ソサエティ 5.0”どころじゃない。北海道の公立学校は昭和を引きづっている。いや引きづっているなんてものではなく昭和そのものだ。薄々は気づいていたが、このプログラムに参加し、確信した。これからの不確かな未来に向けて、年を重ねてきた私たちと未来のある若者がともに課題解決に向けて考え議論していこうという新学習指導要領の理念は（その理念はもっともで素晴らしいが)、この教育環境では無理だ。ハード・ソフトともに韓国のほうが素晴らしかった。訪問した学校がより抜きん出ていたのかもしれないしそう思いたい。しかし、最後に訪問した中学校は地域の中学校だ。選抜はないとなると、施設を含め平均的な学校と推測できる。もう精神性で語るのはやめにしたい。「『ハード面は十分ではないけれど頑張ればなんとかなるって』そんな時代はとうに過ぎていると自覚をしよう。」という決意をこのプログラムは私にさせた。本当に有意義な時間であった。最後に、高い教養を持っていた高学歴の水原のガイドさんがこう話していたことが今でも頭に残っている。「今の日本の、“薬局”と“教育”だけは（韓国は）見習いたくない」と。

今後の活動予定

●授業を通して、日本と韓国の学校文化を比較し生徒に伝えていく予定である。それに付随し、韓国の国民性や文化、日本と韓国の関係について教授することで、異文化理解につながる考察を生徒に促したい。また、同僚教員には個別に、プログラムで得た学びや気付きを伝えていく活動を始めている。学校長には機会があれば公の場で説明も可能であると話している。

●PTA の研修会等で報告をしたいが、今のところ未定である。

A-18　石井 淳

（藤澤総合高等学校教諭）

（写真左手前）

「教員は幅広い人間であれ」

こういう普段体験できないプログラムがあることを教員３７年目で初めて知りました。またこれを知ってから応募締切まで時間が短く、しかも応募の方法がＰＣに精通していない者には難しく大変でした。

今回私の所属する神奈川県教育委員会から教員は私一人、あと二人は教員委員会職員で学校現場にこのプログラムの存在が周知できていない気がしました。生徒を指導する上で教員は幅広い見聞・知識を持つことが必要です。このプログラムは引っ込み思案な教員にとっても、とても参加しやすいものだと思います。もう少し人数を減らして数多くいろんな国・地域で開催していただけるとより良いものになると確信します。

このプログラムに参加して、私を必要としてくれる教育機関があるならどこへでも行ってみたいという気になりました。貴重な体験をさせていただき本当にありがとうございました。

今後の活動予定

●直近の７月 29～31 日に行われる神奈川県総合学科夏季連携講座“海外旅行入門”で今回の学校訪問の話を加えたいと考えています。
とかく英語圏ばかりに目を向けた講義をしてきましたが、今回韓国に行ってみて韓国においても生徒やお店・ホテルの方と英語で十分にコミュニケーションをとることができたので、英語の必要性を今回の受講生に強く伝えることができると考えます。

●今のところ特に予定はありませんが、海外の友人が多いのでこのプログラムの話をする機会は多いものと思われます

A-19　武上 雄輔

（藤井学園寒川高等学校教諭）

「誰かがじゃなくて、僕が。」

５月、香川県ののどかな山あいに位置する藤井学園寒川高校に衝撃が走った。ユネスコからプログラム参加の募集要項が来たのだ。１日で応募書類を仕上げた。「善は急げ」である。香川県から東京に向かう飛行機の中、私は瀬戸内の穏やかな海を横目にプログラムへの期待を膨らませた。プログラムに参加してみて思ったことは、私はこんなにも近い国のことをこんなにも知らなかったのかという事だ。言語・文化・風土・習慣どれをとっても日本と違っていてすべてが勉強になった。それに加えて、とりわけ財産になったのは多くの素晴らしい人たちと関わりを持てた事である。韓国で出会った学校関係者、バスガイドの方、通訳の方などお世話になった人を挙げれば枚挙に暇がない。さらにプログラムで一緒に行動した日本の先生並びに文科省や ACCU の方々との交流は私の今後の教員人生の糧となるに違いない。ESD の “Think globally, act locally”の言葉通り、今回の訪問で得た国際交流の視野を教育に活かし、香川県からコシのある人材を育んでいきたい。隠し味は私の熱い情熱だ。

今後の活動予定

●ニンジンの話をする。私の学校にはニンジンが嫌いな生徒がたくさんいる。ある先生は無理やり食べさすことで克服させようとする。泣きながら食べている子もいる。ある先生はニンジンが好きな子にだけニンジンをあげる。韓国では先生が生徒の前でおいしそうにニンジンを食べる。ニンジンって本当はおいしいのかもと思わせたいからである。日本では受験勉強や進学実績のために子供も教員も手前にある結果に焦点を当てて学校生活を送りがちであるが、韓国では考える力や表現する力、グループでの意見をまとめる力といったきわめて実践的な能力を身に着けることに焦点が当たっていた。生徒たちは積極的に授業に参加し、自分の知的欲求を満たす手段も身に着けているので自分の実力を持続的に伸ばしていける。学校全体も小さいルールよりも大きなルールさえ守っておけば大丈夫という感じである。
ニンジンを生涯食べ続けられる者は自分でニンジンのおいしさに気づいたものではないか。私自身の授業や生徒指導のあり方を今一度見直し、科目の楽しさと、表現する力を生徒に身につけさせたい。具体的には、授業時間を半分に割り、前半で教えた内容を使って後半で ALT と会話をするインプットとアウトプットを同一時間に行うようにする。生徒指導では、一方的に叱るのではなく最初に生徒間同士で話し合いをさせて自分たちでルールを作らせるようにしたい。

●本校では地域交流の一環として週に１度、「寒川テクノロジー」として陶芸教室や和太鼓教室など外部の人を学校に招き入れて授業を行っている。その活動の一環として私が今回のプログラムの内容を生徒の感想とともに学校に掲示する。さらにそれをホームページに掲載することで地域の方からの意見をもらえると考える。学校のホームページでは様々な情報が掲載されており、そこで寄せられた地域の方の意見を学校に還元する。そしてそれをまたホームページに更新し持続的に地域と交流をするのである。

A-20　岡田 勝

（藤井学園寒川高等学校教諭）

（写真左手前）

「７月のソウル Friend」

韓国政府日本教職員招へいプログラムへの参加前と参加後にこれほど、知見が加わるとは想像していなかった。本プログラムは日本での研修から、帰国後のゴールイメージまで綿密に準備され、8 日間が充実し有意義な時間であったと実感した。

知見としては大きく 3 つの事を感じた。1 つ目は「韓国の教育事情は大統領の政策」が大きく影響している事であった。大統領の事情か公約は定かではないが、予算の分配（給食費無料等）や教育システムの導入等の影響力が大きい事を認識した。自由学期制度の導入についての個人的の感想としては、日本でいう「ゆとり教育」のような印象で、結論的には、日本の後追いのように感じた。

2 つ目は「主体的に活動する重要性」である。学力の高い学校を訪問させていただき、主体的活動が随所に拝見することが出来た。マンパワーの向上や生徒への働きかけなど、とても新鮮であった。

3 つ目は「隣国ゆえの切磋琢磨の共存と競争」であった。自国のみという発想ではなく、アジア全体の底上げに、日本や韓国等の国が大きく影響している事であった。世界の中での自国の長所と短所を整理し、強化改善に繋げている向上心は、見習う所であった。

最後に、各都道府県から来られる多種多様な立場や教科の先生と話す事で、多面的に物事の感じ方の違いが認識できた。このような事を含め本プログラムでの成果が自分にとって有意義なものであった事が再認識できた。

今後の活動予定

●総合や社会科演習・国際社会事情という単位の授業を通して、韓国の文化や歴史などを各自で調べ、発表する場を設ける。それに対してディベート形式で、個々の発言を導き、授業全体の進行を主体性持って進行する授業を考えている。
また、韓国語についてもフォーカスし、韓国語での授業展開や流行しているものを取り上げ、韓国や外国を身近なものにする。香川県は、高齢者が多く外国人や外国語に対して、寛容でない部分があるため、学生年代から意識改革を行う。

●文化祭や地域行事のブースで隣国コーナーを作成し、また食事や食器等、韓国に対して多面的にアプローチを行い、地域に身近で安心な解りやすく、触れやすいブースを作る。
田舎の考え方として、保守的で、考え方も少し堅いように感じるため、地域で隣国韓国に対する意識改革を行うには、安全性や安心性は好感触のように考える。
子供会や、スポーツ少年団により幼少期から韓国の文化に触れる事で、スポーツや学校の在り方を紹介する。

A-21　斉藤 真吾

（筑波大学附属坂戸高等学校）

（写真左から３番目）

「日韓両国の教育実践を融合する」

日本の隣国であるにも関わらず、韓国の教育制度や教育事情についての知識がほとんどなかった私にとって、本プログラムでの経験のほとんどが大きな刺激となった。教育施設設備や教育行政制度の充実、生徒の語学力やプレゼンテーション力の高さ等、私たちが参考にすべき点が多々あった。一教員として私ができることは、やはり授業やカリキュラムの改善である。新学習指導要領では、探究活動を通して生徒の資質・能力を伸ばすことが謳われているが、韓国の教育方針は軌を一にしていることがわかった。既に実施されている韓国の「自由学科制」や「高校単位制」を始めとする教育制度は、１０年、２０年後の日本の教育が歩む道を示しているように感じられ、その流れに乗り遅れないように教員は研鑽を積まなければならないと改めて認識できた。勿論、国際学力調査で日本の学力水準が上位に位置する等、日本の教育の良い点もある。日本の教員として、本プログラムで得られた有効な知見を、これまでの教育実践にどのように取り入れていくのかを絶えず検討していきたい。

今後の活動予定（抜粋）

●本校教職員への校内研修会において、本プログラムの概要、韓国の教育事情、今回の経験から得られた知見を共有する場面を設定する。

●STEAM 教育の観点を取り入れた理科授業を実践する。現地では、電池の原理を踏まえて製作された美術作品を見ることができた。生徒の創造性を伸長すること、他者の多様性を理解することを指向した理科授業を設計したい。

●SDGs の達成に向けて、理科授業という側面からアプローチする。国際理解教育は、社会や英語の教員だけが中心になって行えばよいものではなく、担当教科に関わらず全教員で取り組むべきものであることがわかった。一見、SDGs と理科教育は無関係のように感じられるが、理科教員としてできることを検討していきたい。

●本プログラムで知り合うことのできた方々との継続的な交流を続けていきたい。

A-22　陣野 俊彦

（東京都立大島海洋国際高等学校教諭）

「大成長の１週間」

本プログラム１週間で自分が一番成長できた自負がある。１点目に司会進行係の任務、２点目に最終日の討論会への参加である。

全国から集まった教員の司会をするのは貴重な経験だった。初日に個性溢れ出る自己紹介を聞き、一人一人の個性が出せるように司会に徹していこうと心に決めた。朝の振り返りでは目の覚めるようなコメントの数々、評価会では場を設定するだけで、話の止まらない長時間の議論など、先生方の力量に圧倒される日々だった。

本研修の総括にもなる韓日教師教育フォーラムに討論者として参加をさせていただいた。韓日教師合同授業、韓国への修学旅行の実施、五感を使った研修の充実の３点を提案した。どの提案も訪韓前に考えたものだが、参加中の韓日教師の熱量を見て、どれも実現可能であると確信した。本研修を抽象化して終わらせるのではなく、まずは自分が具体的に実践をし韓日交流を推進していく決意である。

このように思えたのはACCUの岡野さん、Aグループの皆さんのおかげです。本研修に関わったすべての皆様に心からの感謝を申し上げます。

今後の活動予定

●本校は実習船「大島丸」を保有しており、現在新しい船が造船中である。以前は海洋実習で韓国に行き交流をしていた背景がある。新しい船になり、海外交流が復活した際に韓国研修を提案し、国際部主任として国際交流を推進していく。その際にSDGｓ「海の豊かさを守ろう」を同じ海洋国家としての共同のアプローチを考えていきたい。
次に修学旅行先として韓国を進めていく。政治的に不安定な今だからこそ、本当の韓国を見てくる必要があると考える。生徒には自分の目で見た情報を得る環境作りをしたいと思う。明洞の町、日本語を学ぶ生徒との交流を通し、国際理解感覚を醸成させたい。

●伊豆大島は毎年一人、島で留学生を受け入れている。島の留学生の会と学校が一体となり取り組む大切な行事の１つである。今年はカナダからの留学生が来島予定であるが、今後は韓国の留学生受け入れも検討してもらえるよう働きかけをしていく。
また大島の中学への体験授業、東京海洋大学での体験授業で本研修を題材とした国際理解の授業をする予定である。保護者も見学自由であり、地域や東京の保護者・地域の方にも経験を伝えていきたい。

A-23　松野 至

（名古屋経済大学市邨高等学校教諭）

（写真右手前）

「未来を背負う子供達と関わる教員の役割」

我々教員は、学校という公的な場所で、未来を築く子供達にとって、影響力のある存在である。そのような立場にあるわれわれ教員には、大きな責任がある。それは、地球市民教育を実施し、世界平和の重要性を体感させ、世界の平和に向けて、主体的に行動できる心を育てることである。

本校では、難民支援・貧困支援を、生徒保護者とともに実施している。実際に現地へ赴き、現地の現実を実際に知り、現地と継続した交流を行うことで、より深い理解へとつなげることができた。相手の理解が深まることで、現在も、継続した SDGs の活動が続いている。

このような活動は、政治的関係が良好とは言えない日本と韓国の関係改善においても有効である。なぜならば、互いの文化には、それぞれの魅力があり、互いの魅力を理解することが、対話の第一歩となるからである。今回、韓国訪問時、私は、日本語を学び、日本の文化を愛する子供達と出会った。指導する側である教員とも交流を行い、どちらも、日本語で交流をし、互いの国の情報を共有し、互いを理解することができた。そして、私も、韓国の多くの魅力に気がつくことができた。同じ地球市民であることを改めて感じることができた。ユネスコの理念の実現にむけた、日韓交流を行うことができたと感じている。

我々教員は、未来を背負う子供達に、大きな責任がある。それは、地球市民教育を行い、広い視野を育むことである。地球市民教育を行うことで、世界平和とつながる、やさしさにつつまれた種を、子供達に残していけるのではないだろうか。

今後の活動予定

●本校では、学校内の wi-fi を利用して、全生徒が自身の iPad を活用して、学べる環境にある。その点を活用して、国連 UNHCR 等の外部機関と連携し、海外とのスカイプ接続などを行なっている。この環境を生かし、文化交流を実施し、交流を深め、地球市民教育を実施していきたい。また、可能であれば、前例のあるプレゼントボックス交流を行い、互いの文化を、互いが紹介するスカイプ授業なども実施できたらと模索している。来年には、韓国訪問団が日本を訪日されると聞いた。東京ではあるが、訪日の際に、交換をさせていただくことを提案させていただきたい。

●現在、カンボジアへの貧困支援を、学校で行なっています。元国連 UNHCR のスタッフが、カンボジアにて貧困支援を実施、私も建設にボランティアとして参加しました。そして、カンボジアと学校をスカイプ接続にて理解を深め、現在、貧困地域の学校へ遊具の設置に向けたチャリティー活動を継続して行なっています。この活動は、保護者によって、地域の夏祭りでのチャリティー活動へとつながり、地域・保護者・学校・卒業生へと広がりました。同様に学校関連系を行い、保護者、地域へと広げ、継続し、PDCA サイクルへとつなげていきたい。

A-24　織田 俊

（神奈川県教育委員会教育局指導担当主事）

（写真右手前）

「韓国の生徒との交流を通して感じた「教育」について」

本プログラムを通して、韓国の教育事情を知る貴重な機会となるとともに、教職員や生徒の皆さんと交流をすることで、「教育」についての自分自身の考えを見直すことや新たな視点を持つことができ、大変な有意義な時間を過ごすことができた。特に、高校を訪問した際に交流することができた日本語科に在籍する生徒たちの日本語力の高さに驚くとともに、1 学年の生徒の 1 人は「将来、日本の大学に進学したいので、日本語の勉強は楽しい」と満面の笑顔で語ってくれたことがとても印象的であり、将来を見据えた教育内容や生徒の自主性を重んじた教育活動の重要性を改めて感じることができた。また、体育の授業も見学させていただき、そこでは生徒を枠にはめ込みすぎない教育活動を目の当たりにし、自分自身が思い描く体育授業とは異なり、授業のあり方の一つとして参考となった。

本プログラムから、両国とも教育や子どもたちへ対する思いや熱意は同じであることが分かり、韓国との教育交流の意義を強く感じることができた。本プログラムで巡りあえたすべての関係者の方に感謝するとともに、ここで得られた経験を活かして、子どもたちのために尽力したい。

今後の活動予定

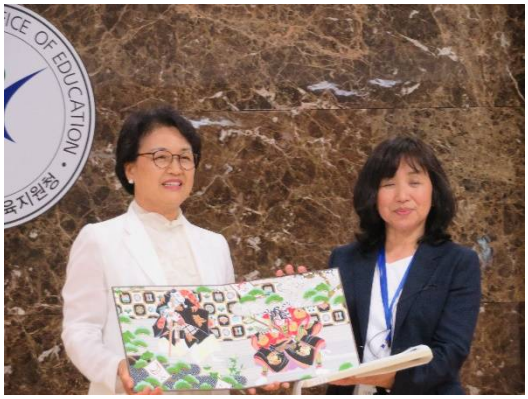
●所属内で本プログラムを通して得られた情報を共有する。

●本プログラムで得られた学びを研修や各種会議等の企画運営に活かす。

●本プログラムを通して交流することができた韓国の関係者をはじめ、日本の教職員の皆様と今後も情報共有を図り、県内の教育現場に活かせるよう交流を続けていきたい。

B-01　北岡　淳子

（京都教育大学附属特別支援学校教頭）



（写真右）

「韓国派遣プログラムを終えて」

今年の１月に韓国の先生方をお迎えし、本校の見学をしていただきました。その時の先生方の熱心な質問の数々に驚いたことを記憶しています。そして、今回、自分自身がこのプログラムに参加し、韓国の教育現場に赴き、見聞きできることの意味を考えると本当に期待をして参加しました。韓国の教育について丁寧にオリエンテーションをしてくださったこともあり、不安無く各校・教育庁へ訪問することができました。皆さんが手厚く迎えてくださったことや、予定にはない事柄についても快く受け入れて下さったことに感謝しています。また、児童生徒の生き生きとした姿を見ることができ、先生方の思いが形になって表れていると思い、「自校でもそうできているのか」と思い返す良い機会になりました。

今後の活動予定

●京都教育大学の学生に、韓国の教育についての講義をしました。具体的には、教育制度や韓国の先生の話に加えて写真を交えて講義をしました。特に「障害児指導法」の講義の中なので、特別支援学級の教室の様子や授業風景など、日本の授業風景と変わらない部分について話をしました。学生が外国の特別支援教育について考える良い機会になったと思います。

B-02　鈴木　未央子

（八千代市立大和田南小学校教諭）

（写真右）

「教育・文化理解の懸け橋になるために」

本プログラムで特に印象に残ったことが２つある。１つ目は「韓国の方々の温かい歓迎」である。お会いした先生方や子どもたちは、皆温かく私たちを迎え入れてくれた。来年、もし私の学校にいらっしゃるのであれば、今回のお礼の気持ちを込めて歓迎をしたいと感じた。

２つ目は「子どもの生き生きとした姿」である。韓国の子どもたちは多くが放課後に習い事に通い多くの勉強をしていると聞き、「韓国の子どもは大人びているのだろうか」という思いがあった。だが、訪問先で授業補助に入った際には、子どもたちは日本の子どもと変わらない、生き生きとした姿を見せてくれた。

私は今後、この交流を「たった一回」ではなく「最初の一回」とするために、今後の交流の懸け橋となりたい。文化や教育の交流は、政治や外交問題とは違った面から韓国を見ることができる機会となる。子どもたちが国際社会で生きていく力をつけるために、今後も積極的に交流をもちたい。

今後の活動予定

●本プログラムの内容を、報告会を通して学校全体に広め、学校全体において海外交流の意識を高めたい。また、ESD の推進のためにも、教員だけでなく子どもたち同士でも継続的な文化交流を行いたい。

●ESD ユース・コンファレンスに参加し、今回の活動について一般企業の方や他団体の方と話し合い、さらに交流を深めたい。

B-03　岩附　ありさ

（八千代市立みどりが丘小学校教諭）

「韓国派遣プログラムに参加して」

韓国の教育現場を訪問し、子どもたちや教職員と交流をもてたことが、大変貴重な機会であったと思います。文化交流授業を行わせていただき、韓国の子どもたちの意欲や素直さを感じることができました。また、同年齢の韓国の教員の方と話をすることができました。教育に対する考え方や個人的に研究していること、今後の展望等、様々な視点から話ができました。同年齢ということもあり、大変刺激を受けました。改めて教師は研究と修養に努めなければならないことを再認識しました。今回のプログラムを通して、韓国の教育事情を学ぶことができたのはもちろんですが、同じグループの先生方との出会いが、私にとって財産となりました。教育に対して高い意識をもち、教育者としてプロフェッショナルな先生方と共に過ごしたこの 8 日間は、有意義な時間でした。今後もこのつながりを大切にしていきたいと思います。

今後の活動予定

●本校はまだユネスコスクールに申請中の段階のため、まずは全職員に SDG s や ESD を意識し、教育を実践していくよう呼びかけていくところから始めようと考えています。また、学校全体として組織的に実施できるよう、SDG s 達成のための 1 つの柱を立てて、全職員で実行していく必要があると考えます。研究として実施していくことが近道と考えるので、現在の研究教科である道徳と結びつけられたらと思います。

●発表する機会をいただくのは難しいと思うので、自らが地域の方と交流する場面を多くもち、会話をする中で学んできたことを発信していけたらと考えます。

B-04　中里　孝洋

（八千代市立大和田西小学校教諭）

「未来をつくる子どもたちのために」

本プログラムを通して，大変多くのことを学ぶことができました。一つは，韓国の学校や教育事情を見たり，聞いたりしたことです。韓国と日本の違いを通して，日本の教育の抱える課題が見えたように感じました。国や行政の面での違いは，自分にはどうにもできませんが，学校現場において，改善できそうなことは取り入れて実践していきたいです。

二つ目は，日本全国から集まった先生方の話を聞けたことです。県や地域が違えば，同じ日本国内でも教育事情は異なるということを実感しました。他県の先生方の取り組みなどを意見交換することも大変勉強になりました。プログラム中のオフィシャルな話も，プログラム後の親睦を深める席での話も，大変有意義なもので，心に残っています。

韓国の先生方や日本の他県の先生方とお話ししていて，共通していたことは，やはり未来をつくる子どもたちのことを第一に考えているということでした。未来をつくる子どもたちのために，自分自身も ESD や SDG s について，もっと勉強していかなくてはならないと感じた一週間でした。

今後の活動予定

●学校では，夏期休業中の「ESD 研修」の時間に本プログラムに参加した報告を行う時間をいただきました。また，自身でもっと ESD について勉強し，本校での ESD の音頭を取れるようにしていきたいです

B-05　川崎　義昭

（青森県八戸市立城下小学校教諭）

（写真中央）

「国際交流、国際理解教育の大切さを痛感」

我々が韓国を訪問している時に、残念ながらニュース等で、貿易管理問題に絡み、反日運動や日本製品不買運動などが報じられ始めた。日韓の歴史問題などもあり、非常にいたたまれない思いだった。しかし、訪問した学校や施設は、とてもあたたかく歓迎してくれたので大変うれしく感じた。様々な問題があるにせよ、我々のような活動の積み重ねが、国家間の友好には欠かせないものだということがあらためて実感できた。言葉や習慣などが多少違っても、お互いの違いを理解し受け入れることが大切だと思った。違いがあるからこそ、楽しいのであり、それを理由に差別や無視するようなことはあってはならないと考える。国家間でも、全く同じだと思った。今回多勢の韓国の方に接したが、不愉快に思うようなことは全くなかった。つまり、個人レベルでは、親切で、信頼できる方が多いが、国の政策や教育によって、正しく認識しようとしない方がいるのも事実だ。よって、今回のような交流を地道に積み重ね、お互いを理解していくことが何より重要だと思った。今後の授業や活動を通してそうしたことを訴えていきたいと思った。

今後の活動予定

●国際理解教育の授業を通して、お互いの交流の大切さを示したり、韓国の進んだ面や素晴らしいところを紹介していきたい。

●出来るだけ地域の活動を報告する機会を設け、今回の経験を紹介する様に努めたい。

B-06　蒲生　邦博

（アサンプション国際小学校教頭）

（写真左）

「GCED の意識の高まり」

今回のプログラムを通じて、私の中に一番強く残ったのは GCED という言葉だった。私の学校でも ESD の取り組みは行っているが、知識が先行しがちで、本来大切にしなければいけない子どもたちの心の教育の時間が少なくなっているのではないかと感じた。

GCED で大切なのは、まず自分自身を知ること。自分が何者で、何が得意で何が苦手か。その全てを受け入れて、自分という 1 つの軸を持つことが大切だと感じた。次に、身近な相手を知り、受け入れること。自分との違いを認め、他者と繋がるという共感意識を持つことが大切だと感じた。このような繋がりの連続が、「他人事意識」を「自分事意識」に変えていけるのだと思う。やがてその繋がりを国外へまで広げ、地球規模の捉え方ができる子どもたちを育てていきたいと感じた。

このステップは、まさに自分のこのプログラム内での意識の変化であり、非常に濃密な 1 週間を過ごせたということが改めて実感できた。この経験を、1 人でも多くの人に伝え広めることが、今の私の使命だと感じた。

今後の活動予定

●教育活動の見直しを提案しようと考えている。時短勤務はもちろんのこと、形だけの活動になっていないかの見直しを図ろうと思う。ユネスコスクールの一員として、本校の全ての教育活動が意味のあるものにしていかなければいけないし、その先には世界の平和へと道が繋がっていることを全教員に改めて意識づけをしていこうと思う。GCED を実践し、自分を大切にでき、友だちや自分に関わる全ての人たちも大切にできる子どもを育てられる学校を作っていきたい。また、韓国とのネットワークも積極的に活用し、子ども同士の交流の場も設けたいと思う。授業で繋がるのももちろんだが、昼休みなどに気軽にコミュニケーションをとれるような場を設けられればと考えている。

●学校での取り組みを、学校 HP を通じて、外部の方々にも積極的に発信できるようにしていく。HP に掲載することが、全世界の人たちに広く伝えられる最も効率的な方法だと考えている。

また、学校でのボランティア活動などの取り組みを、近隣住民の方々にも声をかけさせていただき、地域で取り組むネットワークも構築できるように進めていきたい。

遠くとの繋がり、近くとの繋がり、多様な繋がりを大切にした取り組みを、学校全体で考えていきたい。

B-07　金子　瑛

（晴明丘小学校教諭）

（写真左）

「つながりから始まる ESD」

本プログラムに参加する中で、「つながり」がもつ力を感じた。

特に強く感じたのは「人とのつながり」である。抱える背景や教育システムなどは日韓で差があるかもしれない。だが、子ども達が未来の創造者であることを意識し、その子どもたちの無限の可能性を信じて、未来を見据えた教育を展開しようと日々取り組んでいる姿勢や想いが、韓国の教職員との対話や交流会を通してつながることで十分に伝わってきた。なにより、ともに過ごした、B グループの教職員の方々には感謝の気持ちしかない。これほど強く、人とのつながりを感じることができたというのは、これからの教員人生において、かけがえのない財産である。全国の、様々な想いをもった、素敵な先生方とつながりながら、１つのゴールを目指し続けていけると思うとワクワクする。

また、韓国の学校を訪問させていただく時間は、ユネスコスクールである自校の在り方について、再考するとてもいい機会となった。今回築いた「つながり」を原動力に自校の取り組みをより推進し、持続可能なものにアップデートしていきたい。

今後の活動予定

●本プログラムの報告会を行って、本校の課題と今後について再考し、ユネスコスクールとしての基盤を固める。その上で、児童を主体とした活動の促進を図る。

●ESD パスポートなど、寄贈していただいた資料・学習材を絡めながら、普段の授業をＳＤＧｓと関連付けながら展開していきたい。

●校内からはじめて地域へと展開していきたい。

B-08　三木　恵介

（奈良市立都跡小学校教諭）

「ヒト・モノ・コトの大切さ　充実の韓国訪問研修」

今回の日本教職員韓国訪問プログラムで得られた所見を「ヒト・モノ・コト」の３つに分けて述べていきたい。1 点目に人との出会いの大切である。本プログラムで多くのＥＳＤに関心をもつ教職員と出会い学びを共有できた。その出会いは自分に新しい発見をもたらしただけでなく、自分が大切してきたことを理解してくれる同志がいることの喜びと安心を与えてくれた。2 点目は、韓国の教育政策への充実した投資である。韓国教育事情の講義や学校訪問を通して気付かされたのは、圧倒的な学校教育に投じる予算の日本との差である。ハード面での差は、現場の者としては如何ともしがたい力の差を感じた。最後は、「コト」として、このような貴重な機会を与えてくれたＡＣＣＵやＫＮＣＵを初めとするユネスコ関連スタッフの方々の尽力への感謝である。やはりこのような大がかりな行事を進め、段取りをしてくださった方々がいてこその今回の自分自身の学びである。プログラムの細かい修正点はあるだろうが、大きなストレスを感じることなくプログラムを終えることができた。充実した疲れを持って帰国できたことに感謝申し上げたい。ありがとうございました。

今後の活動予定

●本校はユネスコスクールに加盟して、5 年以上が経過しているが、ＥＳＤの目立った取組ができていない現状である。本プログラムで得た学びを活かして、まずこの夏休み期間にＥＳＤについての職員研修をおこなう。その内容は、ＥＳＤの入門から実践およびカリキュラムマネジメントである。2 月に奈良市で行われる世界遺産学習全国サミットまでに、世界遺産学習を軸としたＥＳＤ・ＳＤＧｓの取組を学校に浸透させたい。

●本校では、従来から地域コミュニティ人材活用した取組をおこなっている。例えば、世界遺産平城宮跡を地域の方々とめぐる平城宮跡オリエンテーリングである。しかし、そのプログラムにＥＳＤやＳＤＧｓの概念が反映さえているとは言えない現状である。地域懇親会などを活用して地域の方々にもＥＳＤを理解してもらい、地域からも違った角度からの視点をいただけたらと考える。

B-09　水上　智裕

（奈良市教育委員会教職員課課長補佐）

「さまざま視点で学べた有意義な研修」

韓国の教育事情を学ぶ上で、とても有意義なものとなった。直接、学校訪問ができたことや教職員との交流から、韓国の教育事情がよく分かった。特に、教職員の生の声を聞けたのはとても良かった。ユネスコスクールの取組は持続発展可能な社会を目指す上でとても重要だと、改めて感じることができた。

自分は奈良市教育委員会事務局教職員課に勤務しているので、働き方改革と女性管理職の多さに韓国の教育から学ぶものが多かった。講義や、韓国の教職員との交流でいろいろと聞くことができ、日本と韓国の教職員の状況を客観的に比較することができた。韓国では、行政書士など人的配置がなされ、教員の時間外勤務が少ないと思った。他のメンバーも働き方改革には関心が高かった。国をあげて働き方改革に向けて、具体的な手立てが構築されている印象をもった。

今後の活動予定

●持続発展可能な社会を目指して、奈良市は世界遺産学習を中心に据えて、ユネスコスクールの取組を進めているが、今回の研修を通じて知り合った日本の教職員や韓国の教職員と交流をさらに進めていきたいと考えている。

●韓国における時間外勤務の縮減や女性管理職の登用の多さなど、奈良市教育委員会においても参考になる部分が多く、すぐ同じようにはいかないと思うが、参考にできることはしっかりと取り入れていきたいと考えている。

B-10　朝日　仁美

（糸魚川市教育委員会こども教育課
非常勤学校図書館司書）

（写真左）

「実際に見ることの大切さ」

まず学校司書という立場で、このようなプログラムに参加できたことを本当に感謝している。実際に韓国の学校を訪問し、図書館も見学できた。学校司書の方々とも交流が持て、大変よい経験になった。この短い時間の中で、自分の専門外の部分でも、韓国の方々や日本から参加している教職員の方々と親睦を深めることで、相違点を自分の頭で考え、意見が持てる様になった。今まで、感じ取れなかった部分を肌で感じ、その現場に入ることでこんなにも意欲的に知ろうとする気持ちになるのかと久しぶりに興奮する一週間だった。

今後はこの体験を基にＳＤＧｓと学校図書館を繋ぎ、他国との関わりを積極的に持てる子どもたちを育てるような環境を作っていこうと思う。どんな地域の子どもでも、隣国である韓国を身近に感じ交流できる社会になるように、このプログラムは今後も続いて欲しいと心から願う。

今後の活動予定

●本務校の教職員には、口頭ではあるが報告した。今後は高学年の国際理解などを学ぶ際に、登壇させてもらえるようにお願いしている。9 月に行われる新潟県生涯学習協会主催の研修会で事例発表をする予定があり、そこでこのプログラムについても話す。

●帰国後図書ボランティアに来校した保護者にはすでに韓国の小学校・図書室の話をした。同時に英語教育の私なりに見たことを報告した。コミュニティースクール関係者にも個人的にではあるが、報告した。このような研修があり、私のような立場でも参加できたことも伝えた。

糸魚川国際交流協会の依頼を受け、毎年外国人親子に読み聞かせの指導を行っている。今年度も依頼があった場合は、韓国などの絵本も紹介していこうと思う。8 月 24・25 日に行われる絵本図書館ネットワーク主催「第 3 回絵本でつなぐ人と図書館のフォーラム in 宮城」での登壇も決まっているので、この場でも少しではあるが報告したいと思っている。韓国の絵本や日本の絵本がどうやって韓国で出版されるのかに非常に興味をもったので今後このような観点で国際交流が出来ないか考えていこうと思っている。長年続いているプログラムのようなのでお力を貸していただけると嬉しい、ユネスコ・アジア文化センターの図書部門にもお繋ぎいただきたい。韓国の教職員が日本に訪問した時に日本で出版されている絵本を展示・説明して絵本文化でもどんどん交流したいと思った。日本国際児童図書評議会や韓国国際児童図書評議会などと繋がり持てるような活動をしていきたいと思う。

B-11　海老沢　穣

（東京都立石神井特別支援学校指導教諭）

（写真左）

「韓国派遣プログラムで学んだこと」

韓国の教育施策やユネスコスクールの実際を知ることができてとても有意義なプログラムでした。詳細なオリエンテーションや綿密に組まれた交流会やフォーラムを通して、少子高齢化や大学入試をはじめとする教育改革で日本と同じ課題を抱える韓国が、教育施策として日本の先に進んでいることを知り、非常に勉強になりました。ユネスコスクールの様々な取り組みや、コーディング、自由学期制といった新しい授業、整った学校設備や教員の労働環境など、１つ１つが新鮮で学びの多い内容ばかりでした。韓国のユネスコ委員会も教育庁の指導主事や学校の先生方も心を尽くして歓待してくださり、感謝の気持ちでいっぱいです。韓国の先生方が日本の教育についてもとても関心をもっていることが分かりました。様々な情報交換を通して共に未来の教育について今後も取り組んでいきましょう、という熱い話ができたこと、日本から参加した様々な立場の方たちと幅広いつながりができたこともとても大きな収穫でした。

今後の活動予定

●指導教諭として校内や他校、他県で研修会講師をする機会が多くあります。その中で今回のプログラムの紹介や見聞きしてきた韓国の教育についてお伝えしていきます。また今年度、東京都教員委員会の「特別支援学校における国際教育推進委員会」委員となり、特別支援学校での国際理解教育を先導していく立場となりましたので、今回の交流を実際の子どもたちの国際交流の実践へと発展させるとともに、ESD、SDGs の取り組みについても委員会で提案をしていきたいと考えています

●特別支援学校における SDGs をテーマにしたプロジェクト型学習を目指し、地域や企業と連携した取り組みができないか検討を進めています。また全国で先進的な実践に取り組まれている SDGs for School のティーチャーズ・ギャザリングなどに積極的に参加し、様々な情報交換やアイデアの共有をしながら実践を深めたいと思っております。また、ユネスコスクール・ESD の取り組みで著名な住田昌治先生を夏期全校研修会の講師としてお招きし、地域や保護者を巻き込んだ学校としての取り組みができないか検討しております。11 月には全国放送教育研究会連盟及びＮＨＫが主催する第 70 回放送教育全国大会で、全国の教員の参加者を対象に、放送番組や ICT を活用した SDGs をテーマにした授業デザインの研修会講師を務める予定です

B-12　山岸　香織

（越前市北新庄小学校教諭）

（写真左）

「無知の知」

私にとって、今回のプログラムで得たものは、「無知の知」だ。韓国には観光で数回訪れていたため、韓国は既知の国という感覚だった。しかし、今回の韓国訪問で、韓国の教育やＥＳＤに関して、全くの無知だったということに気づかされた。

韓国の教育環境の整備充実の素晴らしさ・子どもたちの自主性を育む自由学期制・一歩進んだ働き方改革・放課後教室等、初めて知る日本との相違点には驚くものがあった。また、ＥＳＤについては、私の所属校で今やっている活動（米・大豆・そば・野菜作りや、地区のクリーン作戦等）を新しい視点から捉え直し、目的と明確な方向付けをしていく必要があることに、韓国の小学校を訪問し改めて気付いた。しかし、両国の教育に数々の相違点はあるものの、子どもの知りたい・学びたいという意欲や、教師の子供への熱い思いは韓国も日本も全く同じものであった。

今回の韓国派遣プログラムは、自分自身を振り返ることのできる大変有意義なものであった。この貴重な研修を今後の教育活動に生かしていきたい。本プログラムに係ったＡＣＣＵをはじめとする全ての方々に心より感謝したい。

今後の活動予定

●各クラスでの授業。
●全校集会で、今回のプログラムの報告会を実施する。
●職員への報告会を実施する。
●学級だより・学校だより等で報告する。

B-13　久次米　晶文

（上板町立高志小学校主任主事）

「We are different, We are beautiful.」

本プログラムで得られた成果は大きく分けて 2 つある。韓国の ESD/GCED について知ることができたこと、韓国の人々との触れ合いの中で韓国の文化についての理解が進んだことだ。

日本の ESD は地域の課題を解決していく過程で世界の問題に目を向けていくことが多いのに対し、韓国は直接世界に目を向けた活動を行なっている印象があった。1 校目に訪問した松林小学校では ESD 活動として藍染を行なっており、韓国にも藍染の文化があることを知った。本校は藍染で有名な徳島県でも特に盛んな地域にあり、韓国の学校と藍染を通じて SDGs 達成に向けた教育交流をしてみたいと感じた。

また、教職員交流会や自由時間では多様な人々と触れ合い、韓国のライフスタイルや価値観、日本人に対する思いを知ることができた。私は今年のプログラムにホームビジットがなくて残念に思っていた。それを知った韓国のある先生が「もしよければ私の家に来ませんか」と誘ってくれた。スケジュールの都合で行くことはできなかったが、その優しさに心から感動した。

私は「ESD をコーディネートする学校事務職員」をテーマに活動している。本プログラムでの学びを校内や地域に還元することはもちろん、私自身の活動にも取り入れていきたい。今後、行政的な側面から ESD をサポートすることができる学校事務職員が一人でも多くなるよう活動を続けていこうと考えている。

今後の活動予定

●全校朝会

韓国の学校の授業、休み時間、給食等について、動画で発表する。

●教職員研修会

韓国の教育について、自由学期制、働き方改革、GCED を中心に校内研修で報告をする。

●韓国の大学留学生の招へい（3 日間）

韓国の大学留学生を講師として招へいし、高学年の各学級で韓国の文化や教育について学習する機会を設ける。その際に、本プログラムの体験を児童に伝える。

●徳島県板野郡事務部会

本プログラムの体験を基に「ESD をコーディネートする学校事務職員」というテーマで発表する。

B-14　窪津　宏美

（横浜市立南吉田小学校主幹教諭）

（写真右）

「教員の笑顔と未来」

印象的だったのは、交流した韓国の先生方の笑顔でした。このプログラムでは教員間で対話できる時間が多く設定されていて、お話を伺う中で教師としてのプライドをもって働いていることと、家族との生活や自己研鑽、休暇を充実させながら生活していることがわかりました。日本を旅したことを明るい笑顔で話して下さる先生や、家族との未来を楽しそうに話して下さる先生がいらっしゃることに率直に感動しました。反面、日本での教員生活を振り返る必要があると感じました。韓国教育の先進的な取組を知ることは大変有意義でしたが、それによって充実した教員生活が守られていることがよくわかりました。明るい未来を描く教員がいることは、持続可能な社会への第一歩かもしれません。

横浜市の教員として、増加する外国ルーツの子どもたちへの支援を考えていますが、ESDのもとで多文化共生を次世代にと願っています。お隣の国の先生方との交流を今後も大切に続け、未来につなげたいと思います。

今後の活動予定

●韓国の現地の学校を訪れたことで、教育制度やカリキュラム、教職員の働き方に、今まで以上に興味をもつことができました。自分なりにさらに知見を深めたいと考えますが、同僚とも共有し、世界の中の日本の位置づけを意識した教育活動につなげていきたいです。同行した日本各地の先生方との出会いも貴重でした。交流を続けて、魅力ある教育活動をご教授いただいたり、多様なＥＳＤの取組を共有したりして学んでいきたいです。

●現在学んでいる大学院の日本語教育分野での報告：
7 月 28 日「ユネスコスクール視察で見えてきた日本語教育にいかせる SDG s 」

B-15　渡邉　知和

（横浜市立日枝小学校主幹教諭）

「見方考え方の変容が見られた学び」

私は今回の訪韓プログラムによって、初めから、自分の今までもっていた韓国に対する見方や考え方がとても変わった。日本の教育はとても進んでいる、韓国は知識注入型の詰め込み教育であると思っていたが、とんでもない偏った考えであった。韓国の教育は日々進んでいることを目の当たりにした。一クラス 20～25 人程度の児童の数。生き生きと指導に励む教師の姿。どの教師も若々しく美しいと感じた。目の前の子ども達のために責任をもって教育を行っている様子が手に取るように感じられた。子ども自体は日本の子どもと何ら変わらなく、多様な子どもがいるその教室の中で、生き生きと学ぶ姿が見られた。

大学教授による日本と韓国の教育の分析もとてもわかりやすく、更にこの一番近い隣国のことを知りたいと思った。社会のグローバル化が進む中、私たち教師はもっと諸外国を見て感じて、自国の教育に活かしていかなければいけないと改めて思った。ある種の情報を鵜呑みにするのではなく、自分の目で確かめることの重要性を実感した。政治情勢はあまりいい状況ではなかったが、どの教育関係者も暖かく日本教師団を迎え入れてくれ、歓待してくれた。特別支援学校の先生においては参観中の私の質問に対してメールにて回答してくれ、発達障害を持つ子ども達に対する指導について医療機関に相談することができるシステムなどを教えてくれた。

教育とは社会が生み出すものであり、目の前の点数でなく将来を担う子ども達を大事に育てることの重要性を実感しながら改革を進めている韓国の教育の様子がわかった気がした。

今後の活動予定

●本校の学校で一度全職員に対してどのようなものであったか報告会を行いたいと考えている。

●なかなか地域コミュニティに伝えるまではいかない現状ではあるが、教育環境の素晴らしさを伝えることによって、日本ももっと改善する必要があるのでは？と問題提起していきたい。

B-16　坂下　充輝

（札幌市立北野平小学校学校事務職員）

（写真右から 2 番目）

「韓国の教育視察、そして、教育関係者との交流で得られた私の宝」

本プログラムに参加した大きな目的は、児童生徒が学ぶ韓国の学校の様子や施設を実際に見て、教職員と交流を図ることであった。この目的は、両国のユネスコ事務局の様々な配慮等により、大いに達成され、充実した経験を重ねることができた。特に、教師が教育活動に専念するための諸条件の整備（公的教育投資の多さ）の充実―各校の行政職員の多さや行政実務士の配置といった人的整備、1 学級あたり 25 名程度という児童生徒数、実習教材や給食費の無償化、ICT など施設備品の高い水準での整備―を目の当たりにでき、将来の学校教育の望ましい姿を具体的にイメージできるようになった。

また、プログラムの過程で、韓国の学校教育関係者の親切さ、暖かさに加えて、その熱意に触れられた（一部の韓国の教育関係者とは、帰国後も連絡を継続する関係を築けた）ことは、得難い機会となった。

さらに、韓国の教育を知ることで、日本の教育が重視している部分の良さ―個々の子供を大切にする点や子供同士の学びあいなど―も、従来以上に明確に理解できるようになった。

今後の活動予定

●所属校において、既に校長、教頭及び主任教職員の間で 90 分の時間をかけて、韓国の学校で得た知見や韓国の教育事情、国際理解教育の必要性について共有を図った。本校は、国立教育政策研究所の教育課程研究指定を特別活動の領域で受けているが、そのテーマが「多様な他者との協働」であり、その視点から、全教職員に対して知見の共有や国際理解教育の必要性について還元研修を行う予定である。また、9 月に「学校だより」で今回得た知見を活かした原稿を掲載し、保護者や地域住民に周知する機会とする。また、水原市の水原松林小学校の訪問中に同校の近隣校である名人小学校（Myoungin elementary school）の宋校長と知遇を得て、同校と本校の児童間の ICT を活用した交流事業を年内に実施しようと、両校で計画している

●学事出版月刊「学校事務」誌に、2019 年度中に 2 ケ月にわたり、今回の訪問で得た知見や韓国の教育事情、国際理解教育の重要性について旅行記を兼ねて掲載することについて出版社から依頼を受けていて寄稿予定である。また、この後 2019 年度内には、鹿児島県や沖縄県で各 200 名程度の参加者を得て行う学校事務職員対象の研修会で講師として講演を行うことが決まっているが、その講演の中でも、韓国の教育事情（主に、教職員の業務の在り方と質の高い教育条件整備の視点）と国際理解教育の重要性について触れる予定である。

B-17　野村　恵子

（伊勢市立有緝小学校教諭）

（写真左）

「韓国の英語教育事情」

訪韓前から韓国の英語教育については強く関心を持っていた。国民全体の英会話力も日本より数段高いと聞いていた。実際に訪韓してソウルの街を歩くと大体において英語が通じた。

松林小学校と青坡小学校で英語の授業を参観したが、韓国の教師は、堂々としていて威厳があり、仕事に誇りを持っているように感じられた。英語教育の研修も 200 時間くらいあり、どの先生でも教えられるようになっているとのことであった。また、松林小の 5 年生、青坡小 4 年生の英語の授業内容は、私が日本で教えている内容より少し難しいようであった。やはり、3 年生から週 2 時間英語を習っているとかなりレベルが上がる。

しかし、放課後に英会話スクールに行っている子どももいるので、経済格差によって子どもの英語のレベルに差ができてくる可能性は否定できない。また、英語が話せないと仕事がないと聞いたので、英語以外のことで活躍できる場も大事にできないだろうかと思った。英語嫌いの子どもには生きづらさを感じる社会になっていないだろうかと心配になった。

それぞれの国の特徴や実態を生かして教育することが大事である。日本は、韓国の良いところ取り入れつつ、焦ることなく、英語教育を地道にやってくのが良いと思った。

今後の活動予定

●学校（英語専科教員として拠点校と 2 つの派遣校で働いている）

拠点校においては、校内研修で還流報告をし、それぞれの担任がクラスで児童に韓国について紹介する。派遣校においては、外国語活動の時間の異文化理解の一つとして韓国を取り上げ、今回の研修で知り得たことを児童に話したり、問題提起して児童に揺さぶりをかけたりしたい。

B-18　松本　恭子

（目黒区立五本木小学校栄養教諭）

（写真右）

「自分の目で見て考える価値」

具体的なプログラムとしては、授業を通して教育を観ることが、他国の教育を理解する上でとても重要な手がかりになると感じました。システムや形式的な説明よりも、より直接的に状況が理解できたり、疑問が浮かんだりしやすいからです。想像や情報ではなく、実際に目の当たりにすることの必要性を感じました。韓国と日本について「近くて遠い国」と表現された韓国の教授の言うように、メディアだけを頼れば偏った情報が多いことに気付きません。世界の中では比較的類似する点の多い韓国の教育現場について知ることは、日本にとってとても重要なことです。その比較の中で、自国についてよく理解し、考え、見直すことが真に価値のあることであると感じることができました。それには、授業の参観や韓国の教職員との関わりのほかに、日本の教職員が地域や立場を超えて考えを交えることもとても効果的だったと感じています。ですから、以上の３点がより時間的に増えていけば、さらに良い機会となると思います。とても意義深いプログラムに参加できたことに感謝します。

今後の活動予定

●区内栄養士研修会において、視察報告と ESD の紹介。
●校内 ESD 研修（秋）において、視察報告をする。
●自校学校給食の食材選定について、韓国をモデルとして見直しを図る。
●全国、都内の栄養教諭の教育研究会等で ESD 普及と視察の報告をする。

B-19　吹越　菜央

（府中市立府中第三小学校主任教諭）

（写真左から３番目）

「相手とのコミュニケーションが国際理解の第一歩」

これまでも、現地の学校を見学することはあった。しかし、今回のプログラムのように直接現地の先生方と交流を図る機会はほとんどなかった。韓国で多くの先生方と日頃の教育活動や、互いの国の教育制度など話すことは非常に有意義な時間であった。やはり、互いに直接コミュニケーションを図ることは何より重要なのだと改めて気づくことができた。そして、教師同士のコミュニケーションが重要なことであると同様に、児童同士の直接交流がいかに有効であるかを実感し、プログラム参加前よりも更に、韓国の学校と国際交流をしたい、という気持ちが高まった。私たち教師でさえ、韓国の先生と話したり交流したりすることでとても嬉しい気持ちになり、「韓国に友達ができた。」と、気持ちが高まっているのだから、児童が交流を体験できたらどんなに嬉しく感じ、相手国への興味や関心が湧くのだろうかと考えている。

今回の貴重な体験、大切な仲間との時間を自校の国際交流活動に存分に活かしていきたいと思う。また、多くの日本の教職員が世界に目を向けられるよう積極的に働きかけていこうと考えている。

今後の活動予定

●児童に対しては、外国語活動の授業の中で韓国の言語や文化を紹介する授業を行うことで活用していく予定である。

●教職員に対しては、主任教諭による OJT 研修会にて今回のプログラムで学んだことや感じたこと、研修を終えて考えたことなどを講義する。また、国際交流活動を行うことのメリットを伝えることで、国際理解教育に興味をもってもらい、仲間を増やしていけるようにしたいと考えている。

●校内での国際交流活動の様子をホームページや校内掲示板で発信し、保護者や地域の方に知ってもらえるようにする。

B-20　久保　智章

（福岡県立小倉聴覚特別支援学校主幹教諭）

（写真左）

「韓国の文化・教育に触れておもうこと」

短い期間であったが、韓国の小学校や盲学校を訪問し、授業見学や職員交流を通して考えさせられることが多くあった。国の文化や教育の文化の相違点を知り、日本国内では知りうることができないことを、自分の目で見て、耳で聞き、肌で感じることができたことは大きな財産になったと思う。また、訪問団の先生方はいろいろな視点を持って本事業に参加しており、さまざまな価値観を共有することができたことは、自分の知見を広げる上でとても有益なことだった。

世界的な視点で指導を行う機会が増えている近年、このような機会を通して異国を訪問することは、今後の指導の参考になるとともに、活動の幅を広げる良いきっかけとなった。

今後の活動予定

●校内においては、本プログラムの報告を職員研修会を実施するとともに、ESD,SDG s について情報を提供するとともに、職員の関心を高められるようにしていく予定である。

●県内の他の特別支援学校等において、本プロ不ラムの報告及び ESD,SDG s の指導について、児童生徒に対する指導を行うとともに、職員研修会等での広報活動を予定している。

●また、地域の活動に主体的に参加し、学校における指導のみでなく、自らの生活に反映できるようにしていきたいと考えている。

B-21　宇田　綾恵

（観音寺市立大野原小学校教諭）

（写真左手前）

「人との出会いと現地での経験」

プログラム参加前、個人的に異文化理解、言語に興味があるだけで本当に無知な状態であったが、このプログラムに参加し、人と出会い、現地で体感し、一気に SDG s に引きこまれた。自分の中で「当たり前」の学校文化は一概にそうではないことを、頭では分かっていたけれど、見て聞いて、体験して初めてそれが本当の意味で分かったように思う。

さらに、韓国では教職員の放課後の時間が確保され、その勤務後の時間に語学や自分の興味のある学習をしていること、長期休暇には積極的に学校を出て研修に参加していることから、自主的に学び続けることの大切さを改めて感じ、必ず自分にも取り入れようと、良い刺激を受けた。また、そういった話を聞くときには日本語、韓国語ではなく、英語でのやり取りであったことから、国籍は違っても、共通言語となる言語があればたくさんの人とつながることができる、たくさんの情報を得ることができるということも実感することができた。

今後の活動予定

●校内研修等での研修成果報告

●児童へ韓国の文化や学校紹介

B-22　成田　潤也

（神奈川県教育委員会指導主事）

（写真右）

「「違い」より、「共通点」に意義を見出す」

両国の「違い」はたくさんあるし、目に付きやすい。しかし、数々の体験を通して、実は日韓は「共通点」が多いということに気付かされた一週間だった。高齢化問題、学歴偏重社会、児童生徒指導、保護者対応、働き方改革等々、教育分野に限ってもたくさんの共通点が見つかるが、何より韓国側から、「平和のために教育や国際交流を行うのだ」という意気込みが感じられたのが、最大の収穫だった。韓国は、報道で言われるような緊張感を伴う相手国ではなく、同じ目標を目指す同志である―そのことを肌身で感じることができるプログラムだと思う。

今後の活動予定

●立場上、直接児童・生徒に指導できる立場にはないので、具体的な授業実践はできないが、それをやろうとする現場教員への情報提要や、指導・助言はできるだろう。また、今回のプログラム参加によって、自分自身の認識の変化があり、韓国の言語・文化やESD・SDGsについての情報に、敏感になっているので、国内外の情報収集・情報還元に努めたい。

●仕事以外で知り合った方々に、韓国で温かく歓迎された経験を語っていく。韓国は、決して「恐ろしい国」ではなく、共存共栄していく隣人であることを発信していく。

事業担当者コメント

毎年派遣の時期は韓国でもうだるような暑さが続くのですが、今年に関してはさほど気温は高くはなく比較的過ごし易い日々の中、日本派遣団 50 名は韓国を訪問いたしました。

ACCU からは職員 2 名が訪問団に加わり、ともに学ばせていただきましたが、韓国到着後はソウルに拠点を構え、中学校・高等学校教職員を中心とする A グループは、ソウル、水原、仁川広域市を、小学校・特別支援学校教職員を中心とする B グループは、ソウル、水原、江原道春川市を訪れ､教育に関係するさまざまな立場の方々とお目にかかることができました。

今回は特に教育レベルが高い学校をご紹介頂き、韓国の最先端の教育現場を視察することができるとともに、韓国の教職員のみならず児童生徒たちとも交流できるなど充実したプログラム内容をご準備くださった韓国ユネスコ国内委員会、韓国教育部をはじめとした関係機関の皆様に、あらためて感謝を申し上げます。

1 週間のプログラムながら、移動も少なくソウル近郊の学校訪問でしたので、疲れることもあまりなく、参加者は終始積極的に韓国と交流を深めることに時間を費やすことができ、また文化探訪を通して、韓国の歴史を学ぶだけではなく、日本と韓国との繋がりを感じるなど、日本派遣団は両国の相互理解を推進する時を過ごしました。

閉会式において、立花副団長から「これからの将来を生きていく子どもたちのため、教職員が学びのあり方に変革する力が必要である」と述べられたように、今回の韓国での教育交流を活かして、固定概念に縛られることなく、人と人との心のつながりを大切にしながら、教職員のみならず参加者全員が学び続けていくことが大事であるということを心に留めて、韓国派遣プログラム報告の締めの言葉にしたいと存じます。

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
岡野　晃一、藤澤　弥生

付録

これまでのプログラム実績

実施期間	開催地	訪問人数
2003 年 3 月 16 日～20 日	ソウル、慶州、釜山	11 名
2004 年 6 月 13 日～18 日	ソウル、慶州、釜山	16 名
2005 年 9 月 5 日～13 日	ソウル、慶州、釜山	24 名
2006 年 6 月 11 日～18 日	ソウル、光州、釜山	25 名
2007 年 6 月 10 日～17 日	ソウル、大田、清州、慶州、釜山	29 名
2008 年 8 月 19 日～28 日	ソウル、慶州、釜山	52 名
2009 年 8 月 26 日～9 月 4 日	ソウル、統営、安東、釜山	53 名
2010 年 8 月 25 日～9 月 3 日	ソウル、原州、清州、釜山	53 名
2011 年 8 月 26 日～9 月 4 日	ソウル、昌原、順天、慶州、釜山	53 名
2012 年 8 月 29 日～9 月 7 日	ソウル、水原、大田、論山、公州、釜山	53 名
2013 年 8 月 22 日～8 月 29 日	ソウル、清州、春川、原州	50 名
2014 年 8 月 26 日～9 月 1 日	ソウル、春川、楊口、高城、清州、忠州、丹陽	50 名
2015 年 8 月 25 日～8 月 31 日	ソウル、全羅南道、京畿道、釜山	50 名
2016 年 7 月 12 日～7 月 18 日	ソウル、慶尚北道、仁川、釜山	48 名
2017 年 7 月 11 日～7 月 17 日	ソウル、忠清北道、大邱、仁川	49 名
2018 年 7 月 10 日～7 月 16 日	ソウル、慶尚南道、蔚山広域市、釜山	49 名
2019 年 7 月 9 日~7 月 15 日	ソウル、水原、仁川広域市、春川	50 名

計 715 名

※2003 年度から 2017 年度は国際連合大学「国際教育交流事業」として、2018 度以降は文部科学省「初等中等教職員国際交流事業」として、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センターが委託を受けて実施・運営。

歓迎晩さん会

水原教育支援庁

日韓教師教育フォーラム

A グループ 学校訪問

水原外国語高等学校

仁川国際高等学校

塩光中学校

B グループ 学校訪問

松林小学校

江原明震学校

ソウル青坡小学校

その他

文部科学省委託 2019 年度初等中等教職員国際交流事業

韓国政府日本教職員招へいプログラム　実施報告書

2020 年 2 月

編集・発行　公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

〒101-0051
東京都千代田区神田神保町 1-32-7F　出版クラブビル
電話　　(03)5577-2853
Email　accu-exchange_ml@accu.or.jp
URL　http://www.accu.or.jp

ⓒ2020　Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO(ACCU)